

宮古のスク時代

砂川 正幸 (沖縄国際大学大学院)
真栄田義人 (名護市教育委員会)

1 はじめに

宮古諸島は宮古島・池間島・大神島・来間島・伊良部島・下地島・多良間島・水納島の8島からなり、沖縄島のおよそ300km南西上に位置している。島々の地質は沖縄島の島尻層群に相当するシルト質粘土層とこれを不整合におおう琉球石灰岩から構成されている(註1)。宮古諸島の主島である宮古島の地形は、ほぼ三角形で、おおむね平坦な大地をなし、中心部に108mの高い野原岳がある。野原岳を中心にして低い丘が直線状に脈をなし1.5~2 km間隔で北西から南東へほぼ平行して走っている。海岸は島の東部地域は高く、西海岸は低い(註2)。石灰岩の下層のシルト質粘土層は基盤層となり不透水層である。そのため石灰岩の崖下や大地の中に縦方向にできた自然洞穴の中に自然湧水がかなり発達している。人々はこのような洞穴を整備し、近年まで「降り井(ウリガー)」として利用してきた(註3)。

宮古島と沖縄島との間には水深約1000m、距離にして約300kmの宮古凹地が存在し(註4)この宮古凹地を境に南島の先史文化は、沖縄諸島以北と宮古諸島以南の二系に区分され、前者が縄文早期の土器文化で開始されるのに対し、後者は南方起源との見解が有力である(註5)。琉球諸島のなかで宮古・八重山諸島と奄美・沖縄諸島が文化的共通性をもつようになるのは、沖縄考古学の時代区分でいうグスク時代(12~16世紀)からである(註6)。

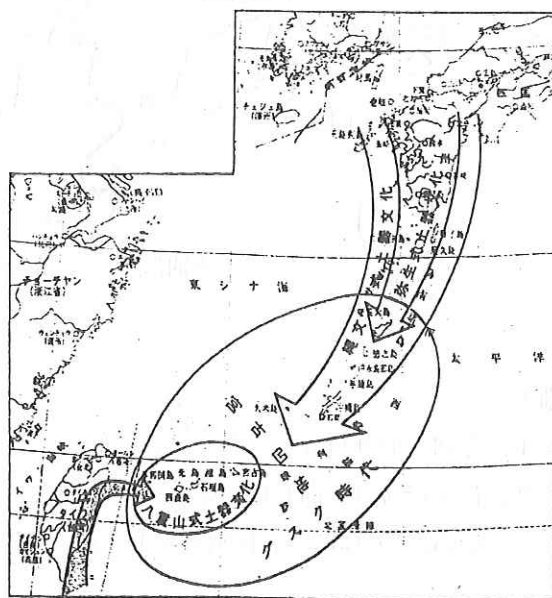


図1 八重山式土器文化の起源(国分説)と縄文・弥生式土器文化の伝播(註7)

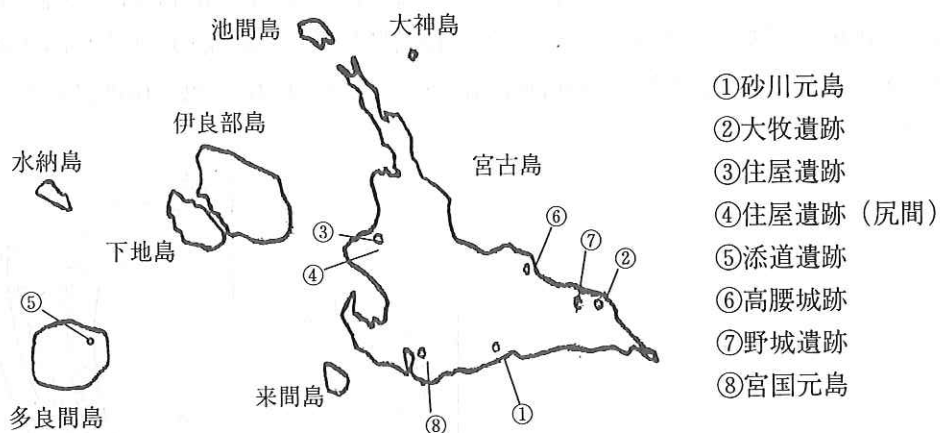
宮古島全域に分布する遺跡の8割が中世～近世の時期に対応される歴史時代に形成されている。概略的に一時期に集中しているかのようにみえる。大半が海岸縁辺部に近接して立地している（註8）。

この時期の遺跡からは、土器（在地土器）と中国製陶磁器が多く検出され、13・14世紀～16・17世紀の遺跡で八重山（早稲田編年）でいえば第二期に相当すると考えられる（註9）。

新集落の方に移動あるいは吸収された、もとの集落跡を宮古では一般に「元島（ムトゥズマ）」と呼び（註10）、地元の土器のほかにも中国陶磁器が大量に出土する（註11）。

グスクという名称のみを基準にすると宮古諸島にはグスク遺跡は1件のみである。「〇〇城（じょう）」と呼ばれる遺跡はいくつかあるが、それは当時からの名称ではないと考えられる。一方、沖縄諸島のグスクのような立地（小高い丘）構造、（石垣）、内容（中国陶磁器等）との類似という点からみると「〇〇城（じょう）」遺跡の他に「〇〇頂（つづ）」、「〇〇御嶽」などの遺跡が宮古にある。出土品の内容だけからみると、前述の「元島（ムトゥズマ）」も同時代をかなり含む。したがって、宮古においてどれを「グスク」とするかは断定しがたいところもある（註12）。

図2 主な宮古のグスク時代遺跡（註7）



備考

1. 今回、取り扱う遺跡のみ記載した。
2. 住屋遺跡（尻間）は、県教育委員会によって調査された住屋遺跡と発掘地区が異なっているため（註23）、区別して取り扱うことにする。

2 研究史

- 1954年 稲村賢敷によって上比屋遺跡の試掘が行われ、同氏は宮古諸島出土の土器を「赤色粗質土器」と名付けた。宮古島初の遺跡発掘となった（註13）。
- 1968年 金子エリカ、メリヒャール両氏によって保良元島の発掘調査が行われ、両氏は宮古諸島出土の土器を「島産赤焼又は土着土器（Indigenous Pottery）」と名付けた。宮古における本格的な考古学調査の第一歩となった（註14）。
- 1969年 友寄英一郎、嵩元政秀両氏によって上の頂遺跡の発掘調査が行われた。本遺跡の発掘によって、宮古の在地土器に二つの系統があり、無文でロクロの使用痕がみられない焼成も一般的に脆弱な土器をA式、土器の肩部に波状文を巡らし、ロクロを使用し、胎土も精選された土器をB式とし、A式はB式に先行することを明らかにした（註15）。
- 1972年 沖縄大学学生文化協会によって、砂川元島の4カ所の地点にて試掘調査がおこなわれた（註16）。
- 1974～1976年 青山学院大学によって砂川元島の2次にわたる発掘調査が行われた。本遺跡の発掘によって宮古・八重山における陶磁器研究が本格化した。また、在地土器がⅠ類、Ⅱ類、Ⅲ類に分類され、Ⅱ類・Ⅲ類は上ノ頂遺跡のA・B式に対応し、Ⅰ類はA式に先行するとされた（註17・註18）。
- 1975年 安里進氏が宮古の在地土器を二型式に分類し、回転台を使用しない第一の型式を「宮古第一型式土器」、回転台を使用し浅い凹直線文と櫛目波状文が土器外面上半部に施文される土器を「宮古第二型式土器」とした（註19）。
- 1978年 下地和宏氏が野城遺跡から採集される鍋状を呈し、一对の外耳を伴う土器を「野城式土器」と名付けた（註20）。
- 1978～1979年 上野村教育委員会によって宮古元島の2次にわたる発掘調査が行われた。本遺跡の発掘調査によって、宮古で初めて堅穴住居址が発見され、また、集落の構造と規模という点においてより具体化された。また、本遺跡出土の土器は

混入物や焼成の違いからA～Eタイプの4型式に分類された(註21)。

1980～1981年 沖縄県教育委員会によって住屋遺跡の2次にわたる発掘調査がなされ、宮国元島遺跡に次いで明確な堅穴住居址が検出された(註22・註23)

1982年 平良市教育委員会によって住屋遺跡(俗称・尻間)が発掘調査され、堅穴式、平地式の住居址が検出され、それぞれの住居址内の遺物から検討した結果、堅穴式住居が古い傾向にあるとした(註24)。

1984～1985年 城辺町教育委員会によって野城遺跡の発掘調査が行われ、出土遺物からグスク時代の遺跡であることが判明した(註24)。

1985年 城辺町教育委員会により大牧遺跡の発掘調査が行われ、出土遺物からグスク時代の遺跡であることが判明した(註24)。

1986年 城辺町教育委員会によって砂川元島の発掘調査が行われた。調査では、青山学院大学の調査で本遺跡の開始期が少なくとも14世紀頃になるということを補強することになった(註25)。

1986～1987年 城辺町教育委員会によって3次にわたり高腰城跡の発掘調査が行われた。調査によって本グスクが宮古諸島域では数少ない石積みをも有するグスクであることが確認された(註26)。

1990～1991年 平良市教育委員会によって住屋遺跡が発掘調査された。調査により土壇墓・石棺墓など、宮古地域では初めての埋葬施設が検出され、また、出土遺物からすでに13世紀頃には集落が成立していたことが確認された(註27)。

3 遺物

主要遺物出土表 1

出土遺物名	土器				陶磁器				石製品				骨製品				雁首			玉類		備考										
	I類土器	II類土器	III類土器	その他・不明	青磁	白磁	青白	染類	須恵器	黒釉陶器	褐釉陶器	その他	石斧	石砥	貝	貝	貝	有孔製品	その他	石製	土製		陶製	磁製	金属製	ガラス製	勾玉	古	滑石製	石鍋	片	
出土遺跡名																																
砂川元島	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○						○	註25
大牧遺跡					○	○			○																							註24
住屋遺跡 (尻間)	○				○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	註22
住屋遺跡	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	註27
添道遺跡			○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	註31
高腰城跡	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	註26
野城遺跡	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	註24
宮国元島	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	註21

主要出土遺物 表2

出土遺物名 出土遺跡名	金 属 製 品											製鉄 関連品		備考	
	鉄 製 品						銅 製 品				その他				
	刀 子	鉄 鏃	鉄 釘	鉄 鍋	棒 状 製 品	鎧 の 小 札	銅 製 キ セル 柄 部	銅 製 キ セル 吸 口	青 銅 製 簪	青 銅 製 用 途 不 明 品	金 属 製 簪	金 属 製 板 状 製 品	フ イ ゴ の 羽 口		鉄 滓 ・ 製 錬 鍛 冶 滓
砂 川 元 島	○	○		○	○					○		○		○	註25
大 牧 遺 跡							○								註24
住 屋 遺 跡 (尻 間)	○														註22
住 屋 遺 跡	○		○	○		○					○			○	註27
添 道 遺 跡															註31
高 腰 城 跡		○											○		註26
野 城 遺 跡													○		註24
宮 国 元 島	○		○	○	○			○	○	○		○		○	註21

土器

宮古から出土する土器は、一般的に「宮古式土器」として呼称されている。この特定の名称はいつ、誰によって命名されたのかは定かではないが、報告書に限定するならば、「宮古式土器」の名称は県文化課が最初であろう。しかし、それぞれの研究者によって名称が表現され、その概念も統一されていない。土器の時期区分については、上ノ頂遺跡(1969年)と砂川元島(1974~1976年)の発掘調査によって、宮古出土の土器は大まかにⅠ~Ⅲ期に区分され、Ⅰ期は約13~14世紀頃、Ⅱ期は約14~16世紀頃、Ⅲ期は約16~17世紀頃に相当するとしている(註28)。

本稿では、唯一Ⅰ~Ⅲ期にわたる区分のなされた青山学院大学による分類を中心に、土器について説明することにする。

表3 宮古の土器分類・名称（註28）

命名者	時期	第 I 期	第 II 期				第 III 期	備考
稲村賢敷			厚手の赤色粗質土器 無釉赤色粗質土器					註29
金子エリカ			島産赤焼又は土着土器					註14
友寄英一郎 嵩元政秀			A 式		B 式			註15
安里進			宮古第一型式土器			宮古第二型式土器		註19
青山学院大学	第 I 類 (黒色磨研土器)	第 II 類		第 III 類			註17 18	
		II a類	II b類					
下地和宏		野城式土器						註20
沖縄県教育庁 文化課			宮古式土器				宮古式土器	註22
			第一種	第二種	第三種	第四種		
				宮古式土器				宮古式土器
			Aタイプ	Bタイプ	Cタイプ	Dタイプ	Eタイプ	

備考

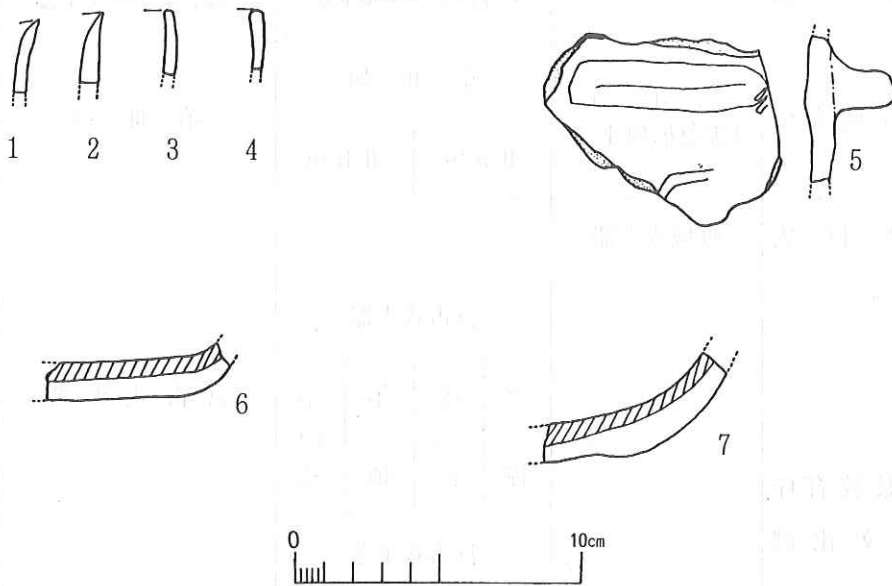
- ・友寄、嵩元両氏 混入物、製作技術や施文などから、2つの形式に分類（註15）
- ・安里進氏 混入物、製作技術、施文などから2つに分類（註19）
- ・青山学院大学 製作技法によって3種に大別（註17）（註18）
- ・県文化課（住屋） 口縁部の形態で4種に分類（註22）
- ・県文化課（宮国） 混入物、形成によって5タイプに分類（註21）

(1) I類土器 (註18) [図3]

- 混和材 胎土に貝殻の細片を大量に含む
- 色調 内面、外面ともに黒色であるの多いが、やや褐色を呈するものもある。
- 焼成 かなり高い
- 器種・器形 深鍋状で、底部は立ち上がりが丸みをもつ平底である。口縁直下に水平方向に付けられた外耳をもつ。
- 器壁 ほぼ垂直な器壁をもち、胎土の厚さは約0.7cm～1.2cm程で、口縁部は外耳の上縁から急激に薄くなるものが多い。

図3 I類土器 (註18)

砂川元島 1～7



(2) 野城式土器 (註20) [図4]

標識遺跡 城辺町字福北にある野城遺跡を標識とする。

野城式土器とは、青山学院大学のいうI類土器の範疇に入るものの、「黒色磨研土器」というには程遠く、磨研どころか、焼成不良で吸水性強い土器である (註30)。

混和材 胎土に貝殻細片及びサンゴ石灰岩の粉末を含むものと、胎土に混入物が全く含まれないものとに分類される。

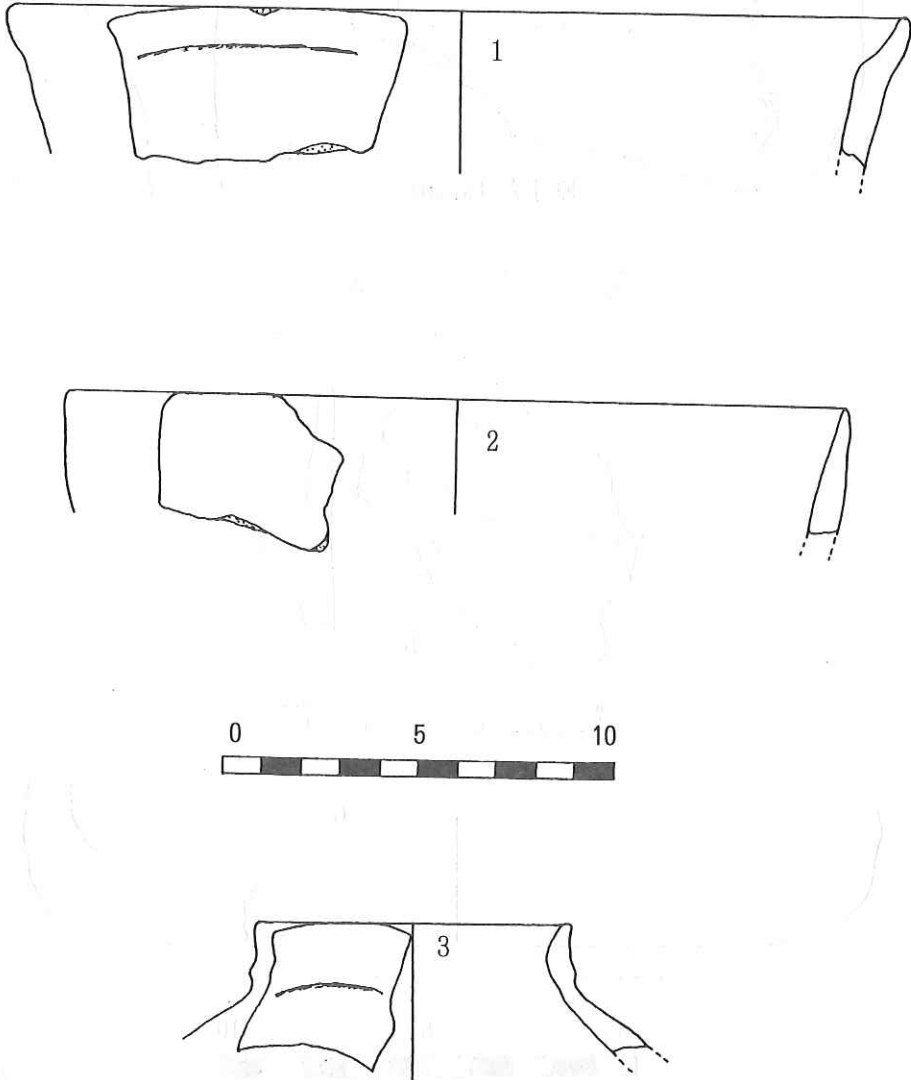
色調 黒色または赤褐色

焼成 脆弱で吸水性が強い

器種・器形 立ち上がりに丸みを帯びた鍋状の平底が主体をなし、なかには壺形もある。口縁直下に横耳状の外耳が付けられている。

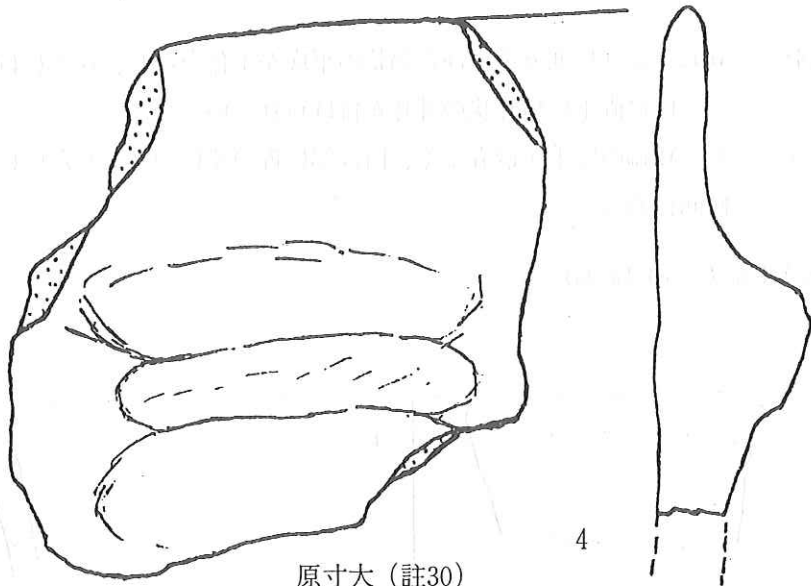
器 壁 8～12mmの厚手が最も多く、口縁部に近づくにつれてしだいに薄くなる傾向にある。

図4 野城式土器（註20）（註26）

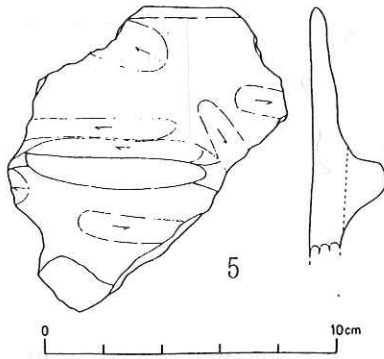
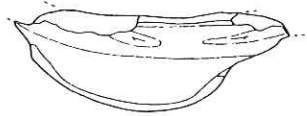


野城遺跡 1～6

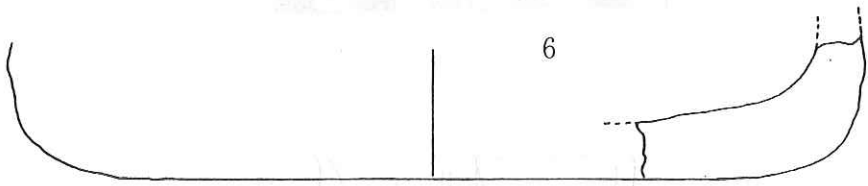
高腰城跡 5 7



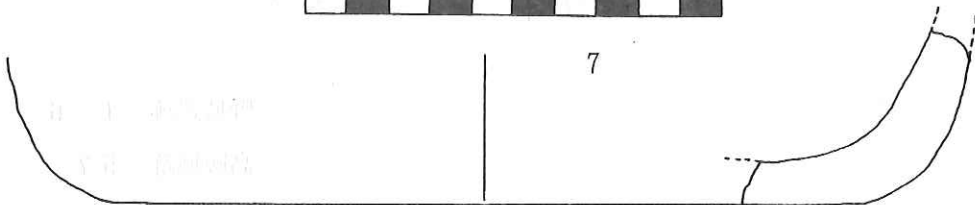
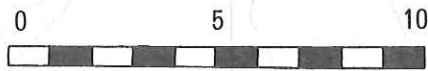
原寸大 (註30)



5



6



7

野城式土器はこれまでそのほとんどが、宮古島の東部方面の遺跡から採集または出土されていた。しかし、1990～1991年の住屋遺跡の発掘調査において野城式土器の範疇に含まれるものが得られたことによって、下地氏のいう野城式土器文化圏（宮古島東部地域）が西部地域まで含むことや外耳土器の分布は宮古島全域に広がる可能性も示唆している（註27）。

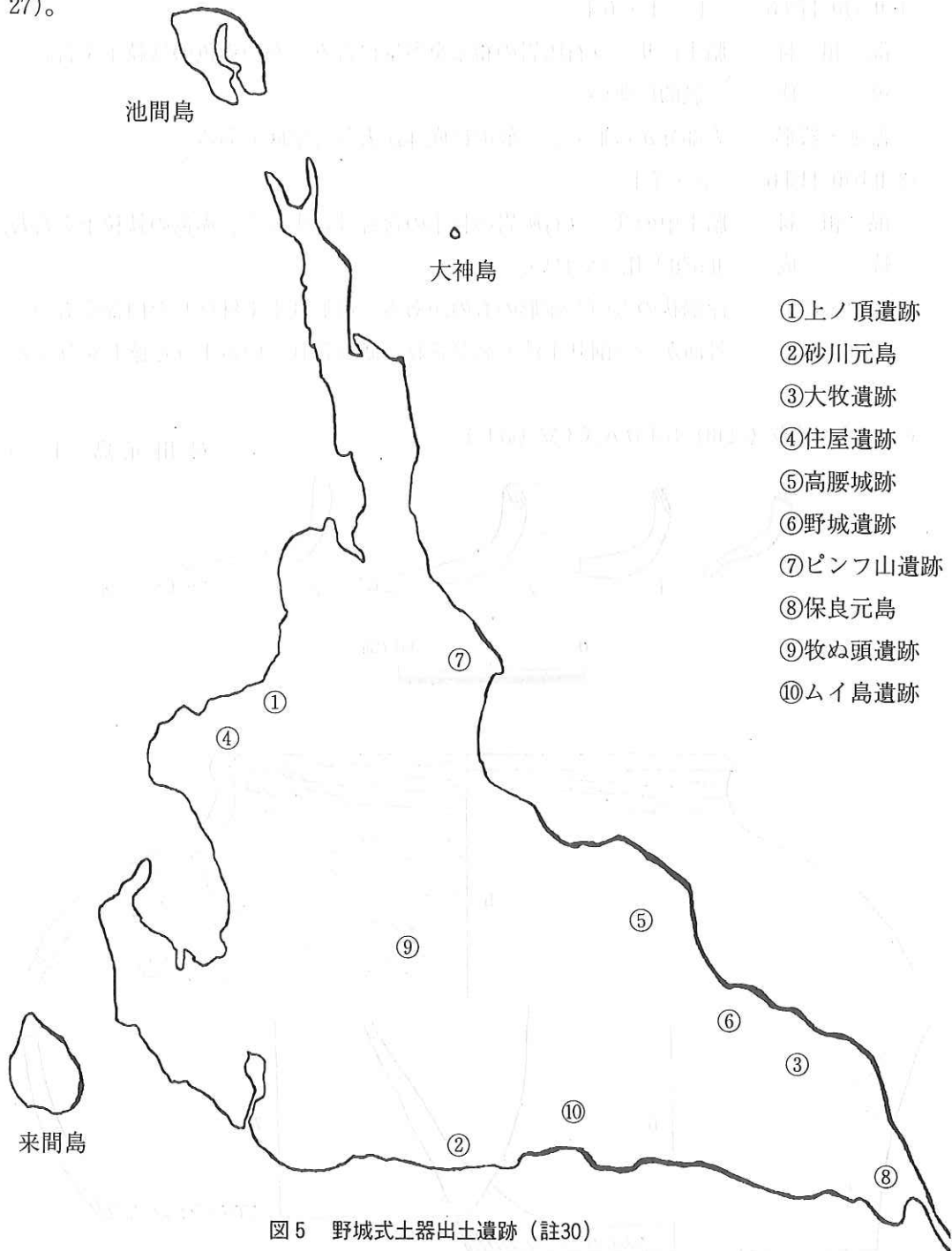


図5 野城式土器出土遺跡（註30）

(3) II類土器 (註18) [図6]

上ノ頂遺跡のA式土器に相当し、胎土にサンゴ石灰岩の粉末または赤色の鉄粒子をも含む、赤褐色の土器をいう。サンゴ粉末の含有量と、器面調整の違いによって二つに分類できる。

①IIa類 [図6 -1~4・6]

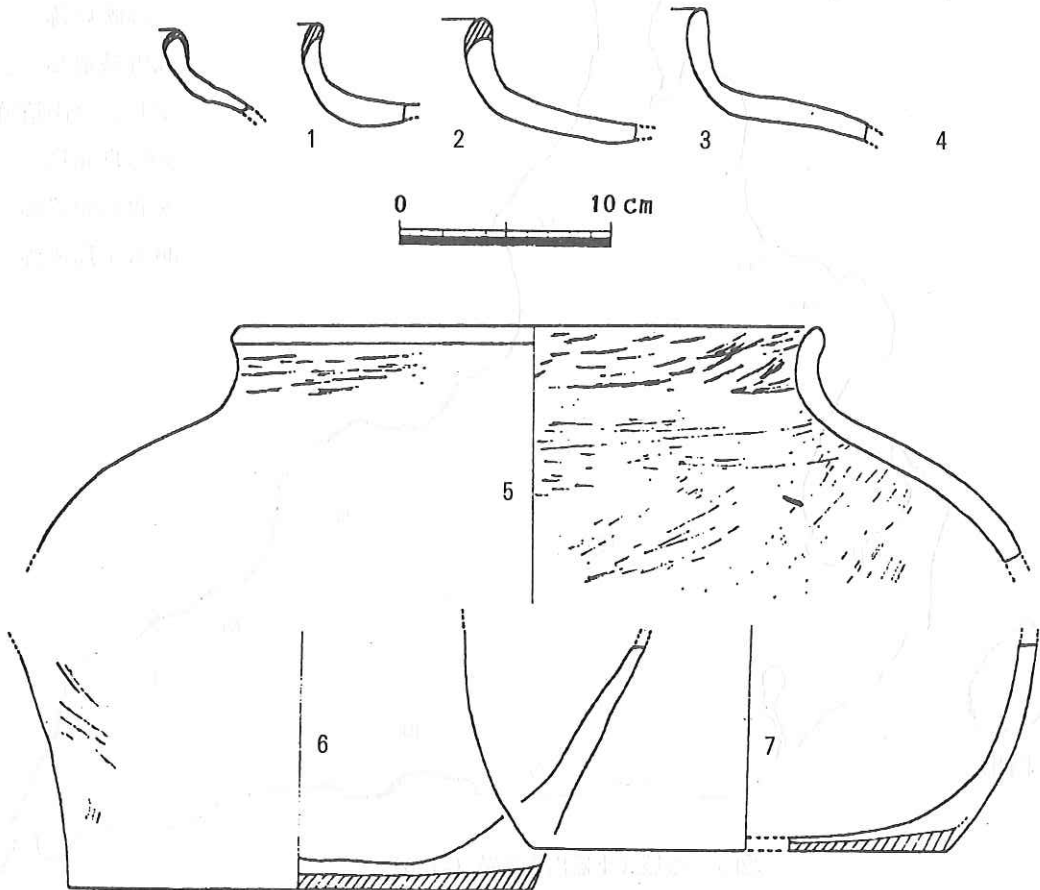
混和材 胎土にサンゴ石灰岩の粉末を多量に含み、かつ赤色の鉄粒子を含む。
 焼成 一般的に悪い
 器種・器形 大部分が壺形で、一般的に底部が大きな平底である。

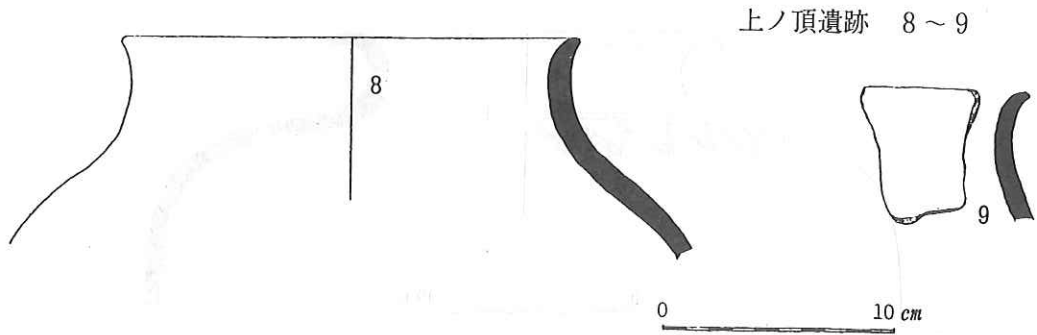
②IIb類 [図6 -5・7]

混和材 胎土中のサンゴ石灰岩の粉末の含有量が少なく、赤色の鉄粒子を含む。
 焼成 IIa類と比べて良い。
 器種・器形 深鍋状のものと壺形のものがある。壺形はやや外反した口縁をもつ。
 器面調整 外面がヘラ削り手法で調整され、研磨されているような感じを与える。

図6 II類土器 (註18) およびA式土器 (註15)

砂川元島 1~7





(4) Ⅲ類土器 (註18) [図7 -1・2・3・4・5・6]

上ノ頂遺跡のB式土器に相当

混和材 胎土中のサンゴ石灰岩粉末や赤色鉄粒子の含有量が極めて少ない

焼成 一般的に良い。

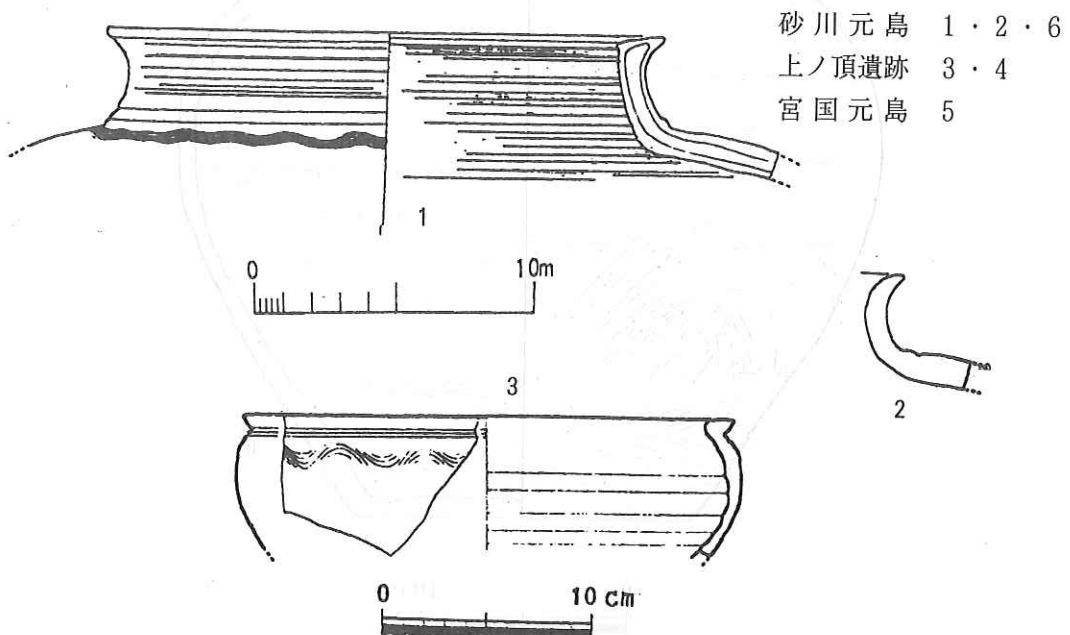
器種・器形 壺形が多く、Ⅱ類と比べて口縁の外反が強い

器面調整 回転板を使用。

文様 肩部に数本の平行沈線文と4本ないし8本の波状櫛目文を有する。

Ⅱ類土器にみられる波状文は壺屋焼にも見られるなど、沖縄本島の陶器と類似することから、沖縄本島の影響による可能性が高い (註15)。

図7 Ⅲ類土器 (註18) (註21) ・ B式土器 (註15) および壺屋焼 (註15)



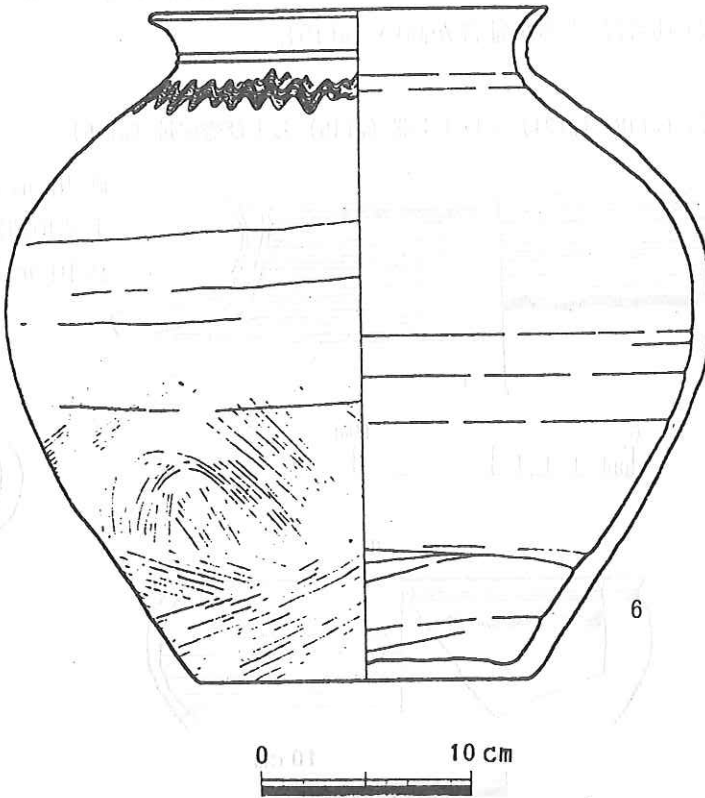
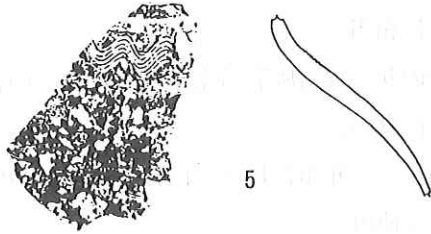
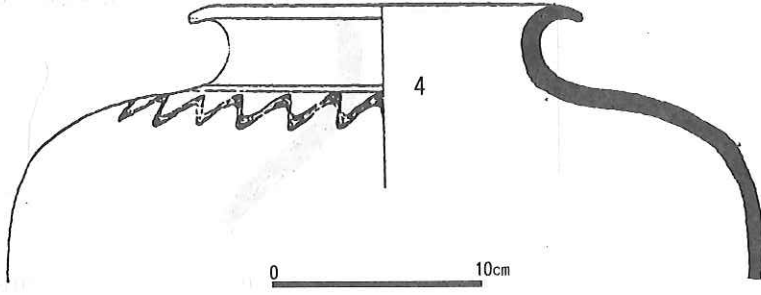


図8 その他の土器(註24)(註26)(註31)

野城遺跡 1
高腰城跡 2
添道遺跡 3

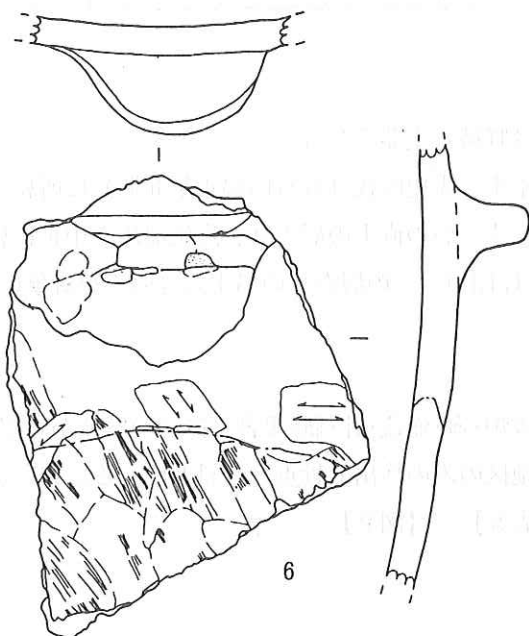
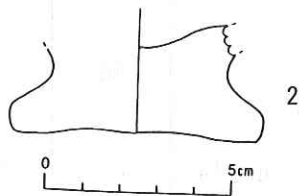
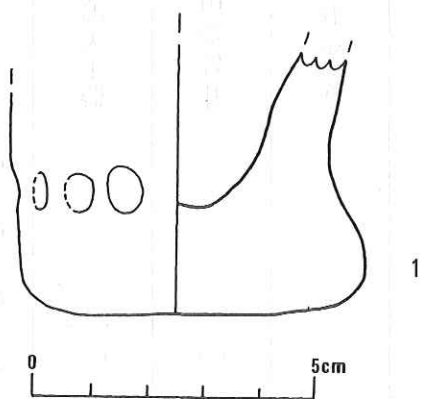


表4 各遺跡における土器の出土状況

出土遺物 遺跡	I 類	II 類	III 類	く び れ 平 底	八 重 山 系 外 耳	滑 石 片 混 入 土 器	備 考
砂川元島	○	○	○				註25
大牧遺跡	○						註24
住屋遺跡 (尻間)		○					註23
住屋遺跡	○	○			○	○	註27
添道遺跡					○		註31
高腰城跡	○	○		○			註23
野城遺跡	○			○			註24
宮国元島		○	○				註21

備考

1. I類のなかには野城式土器を含む。
2. 添道遺跡は、本来、先史時代（八重山編年第Ⅱ期）に所属する遺跡であるが、下田原式土器を包含する層の直上の層より、陶磁器片や中世に属する中森式が出土していることから（註31）、この層からの出土遺跡のみを対象に取り扱うことにする。

青磁

青磁は碗・皿・盤・杯・香炉・壺・壺蓋・鉢・瓶・墨書青磁等の器種が確認されている。鉢・墨書青磁は県内でも、宮古地区のみの検出で貴重な資料といえる。また、香炉が出土していることも注目される。【表5】 【図9】

表5 青磁出土表

出土青磁 出土遺跡	出土青磁											備考
	碗	皿	盤	杯	香 炉	壺	壺 蓋	鉢	瓶	墨書 青磁	器種 不明	
砂川元島	○	○	○	○							○	註25
大牧遺跡	○											註24
住屋遺跡 (尻間)	○	○	○									註22
住屋遺跡	○	○	○	○	○	○		○	○			註27
添道遺跡	○	○	○							○		註31
高腰城跡	○	○										註26
野城遺跡	○	○	○									註24
宮国元島	○	○	○	○	○		○					註21

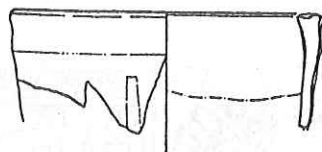
図9



1



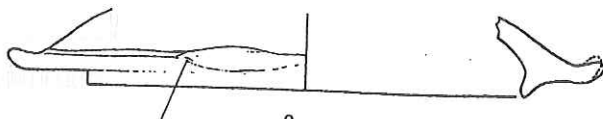
住屋遺跡・尻間出土（註22）



2



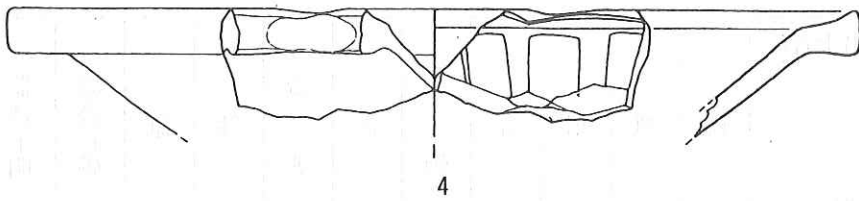
宮国元島出土（註21）



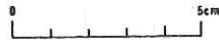
3



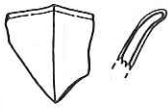
宮国元島出土（註21）



4



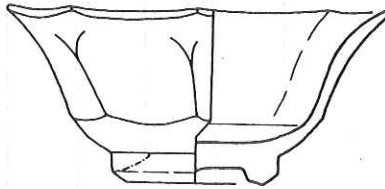
野城遺跡出土（註24）



5



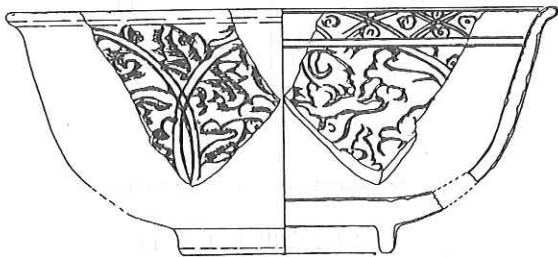
砂川元島出土（註25）



5



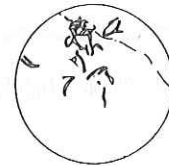
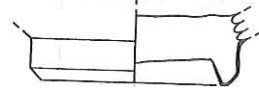
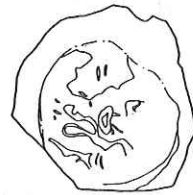
今帰仁城出土（註32）
〔参考資料〕



6



住屋遺跡出土（註27）



7



添道遺跡出土（註31）

1 : 皿 2 : 香炉 3 : 壺蓋 4 : 盤 5 : 杯 6 : 鉢 7 : 墨書青磁

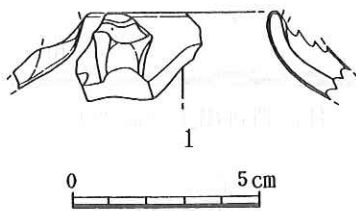
白磁

白磁は、碗・皿・杯・壺・水注等の器種が確認されている。特に古手の玉縁口縁碗や、ピロースクタイプ碗などが検出されているのは注目される。【表6】 【図10】

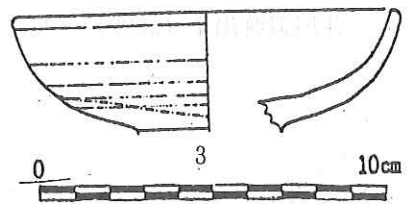
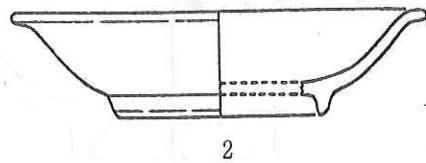
表6 白磁出土表

出土遺跡	出土白磁						器種不明	備考
	碗	皿	杯	壺	水注			
砂川元島	○			○	○	○	註25	
大牧遺跡	○						註24	
住屋遺跡 (尻間)	○						註22	
住屋遺跡	○	○	○	○			註27	
添道遺跡	○						註31	
高腰城跡	○						註26	
野城遺跡	○	○					註24	
宮国元島	○	○					註21	

図10



砂川元島出土 (註25)



住屋遺跡・尻間出土 (註22)

1 : 壺 2 : 外反皿 3 : ピロースクタイプ

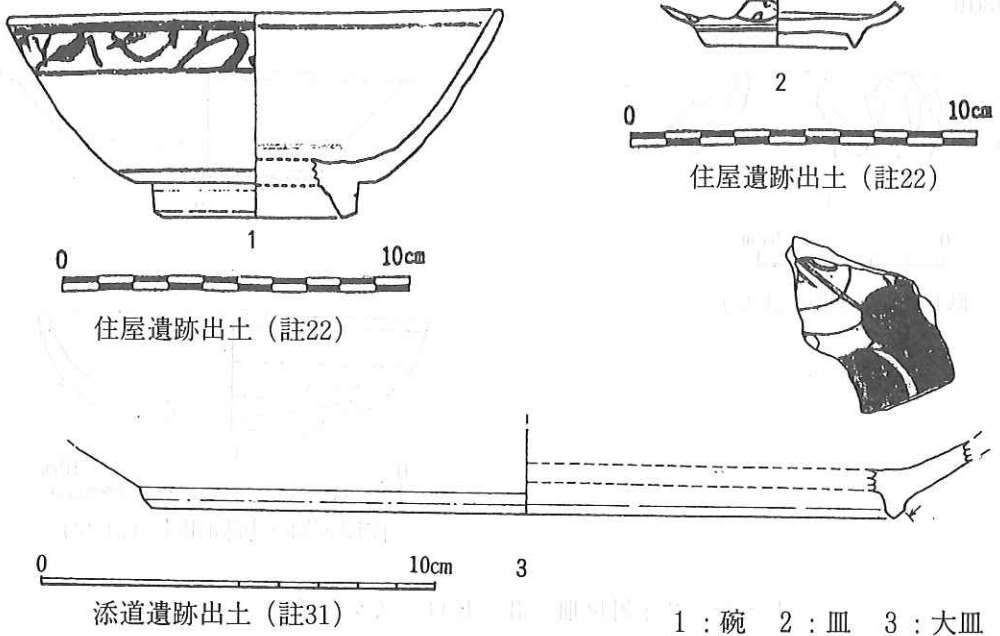
染付

染付は、碗・皿・杯・壺・大皿等の器種が確認されている。比較的小ぶりの製品がウェイトを占めるようである。【表7】 【図11】

表7 染付出土表

出土染付 出土遺跡	碗	皿	杯	壺	大皿	備考
砂川元島	○					註25
大牧遺跡						註24
住屋遺跡 (尻間)	○					註22
住屋遺跡	○	○	○	○		註27
添道遺跡	○	○			○	註31
高腰城跡						註26
野城遺跡						註24
宮国元島	○	○				註21

図11



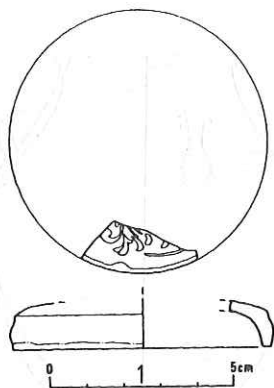
青白磁

青白磁は、小皿、合子の蓋等の器種が確認されている。合子の蓋の検出例は県内でも稀で、貴重な資料である。【表8】 【図12】

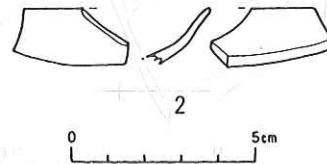
表8 青白磁出土表

出土青白磁 出土遺跡	小 皿	合 子 蓋	備 考
砂川元島	○		註25
大牧遺跡			註24
住屋遺跡 (尻間)			註22
住屋遺跡			註27
添道遺跡			註31
高腰城跡		○	註26
野城遺跡	○		註24
宮国元島			註21

図12



野城遺跡出土（註24）



高腰城跡出土（註26）

1：合子蓋 2：小皿

褐釉陶器

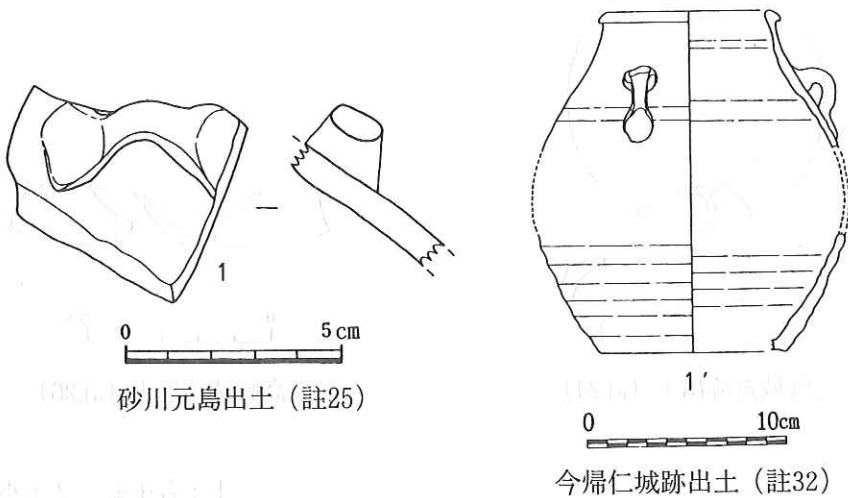
褐釉陶器は、壺・鉢・盤・茶入れ・洗・瓶等の器種が確認されている。

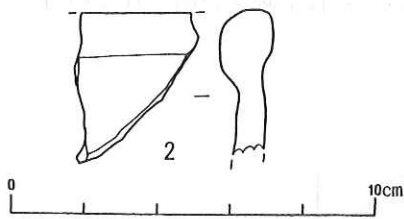
茶入れが出土していることは注目されている。【表9】。【図13】

表9 褐釉陶器出土表

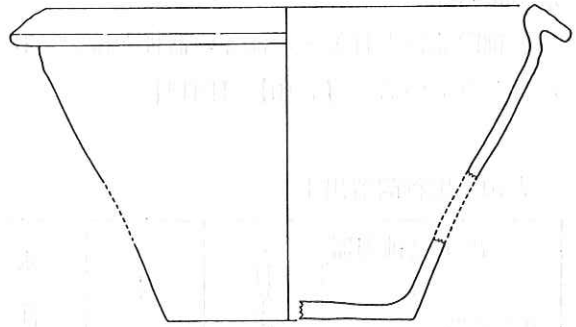
出土褐釉陶器 出土遺跡	壺	鉢	盤	茶入れ	洗	瓶	備考
砂川元島	○		○	○			註25
大牧遺跡	○	○					註24
住屋遺跡 (尻間)	○						註22
住屋遺跡	○			○	○		註27
添道遺跡	○					○	註31
高腰城跡	○				○		註26
野城遺跡	○						註24
宮国元島	○						註21

図13

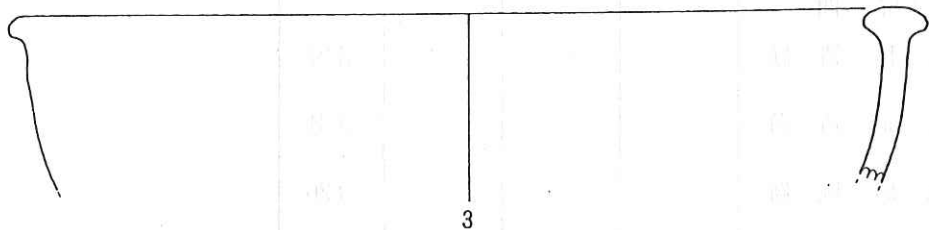




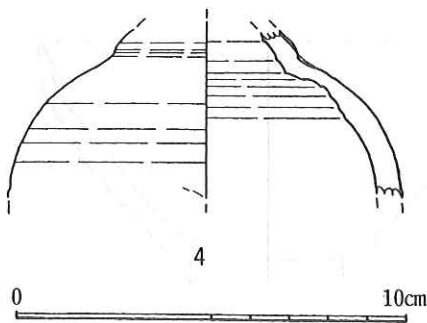
大牧遺跡出土 (註24)



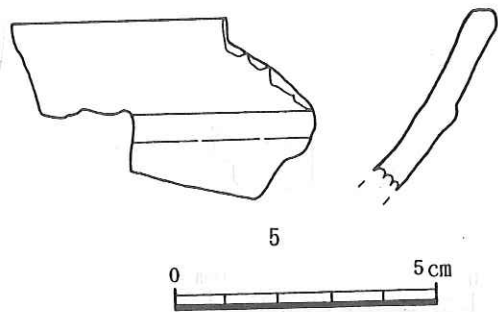
今帰仁城跡出土 (註32)



高腰城跡出土 (註26)



添道遺跡出土 (註31)



砂川元島出土 (註25)

1 : 皿 2 : 鉢 3 : 洗 4 : 瓶 5 : 茶入れ

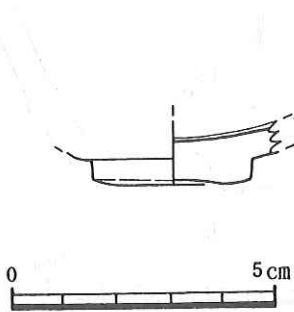
黒釉陶器

黒釉陶器は天目茶・水注等の器種が確認されている。天目茶碗が検出されていることは注目されている。【表10】 【図14】

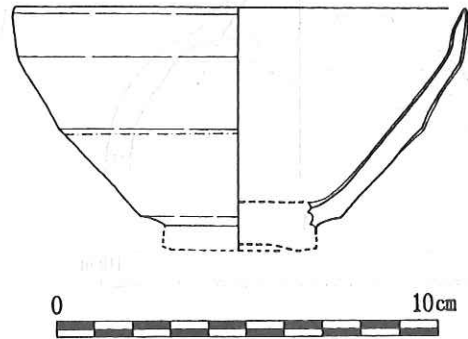
表10 黒釉陶器出土

出土遺跡 \ 出土黒釉陶器	天目茶碗	鉢	水注	備考
砂川元島	○			註25
大牧遺跡				註24
住屋遺跡 (尻間)				註22
住屋遺跡	○	○	○	註27
添道遺跡				註31
高腰城跡				註26
野城遺跡				註24
宮国元島				註21

図14 天目茶碗



砂川元島出土（註25）



今帰仁城跡出土（註32）
〔参考資料〕

カムイヤキ系類須恵器

カムイヤキ系類須恵器は壺のみ確認されているが、細片のため器種不明のものも出土しているようである。【表11】 【図15】

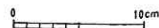
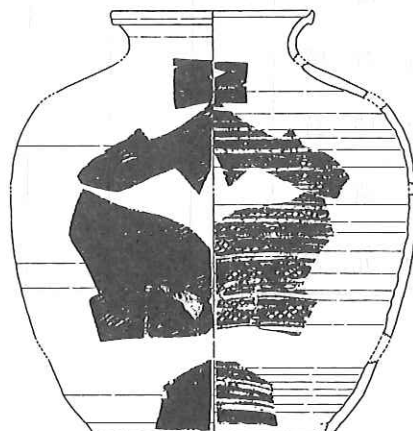
表11

出土類須恵器 出土遺跡	壺	備考
砂川元島	○	註25
大牧遺跡	○	註24
住屋遺跡 (尻間)		註22
住屋遺跡	○	註27
添道遺跡	○	註31
高腰城跡	○	註26
野城遺跡	○	註24
宮国元島		註21

図15 カムイヤキ系類須恵器壺



高腰城跡出土 (註26)



ヒヤジョー毛遺跡出土 (註33)
〔参考資料〕

その他の陶磁器

住屋遺跡（註27）の発掘調査において検出された県内でも希少な陶磁器を中心にその他の陶磁器としてまとめた。しかしながら、報告は概報段階で、本報告は行われていない。そのため、実測図を手に入れることができなかったため、ここでは図版は割愛し、出土表のみの紹介にとどめることにする。【表12】

表12 その他の陶磁器出土表

出土陶磁器 出土遺跡	三 彩 水 注	三 彩 鴨 型 水 注	瑠 璃 釉 杯	瑠 璃 釉 壺	翡 翠 釉 皿	赤 絵	黒 磁	サ ワ ン カ ク ロ ク 窯 系 鉄 絵 合 子	邪 鬼 面 三 足 香 炉	備 考
砂川元島						○				註25
大牧遺跡										註24
住屋遺跡 (尻間)										註22
住屋遺跡	○	○	○	○	○	○	○	○	○	註27
添道遺跡										註31
高腰城跡										註26
野城遺跡										註24
宮国元島						○				註21

石製品

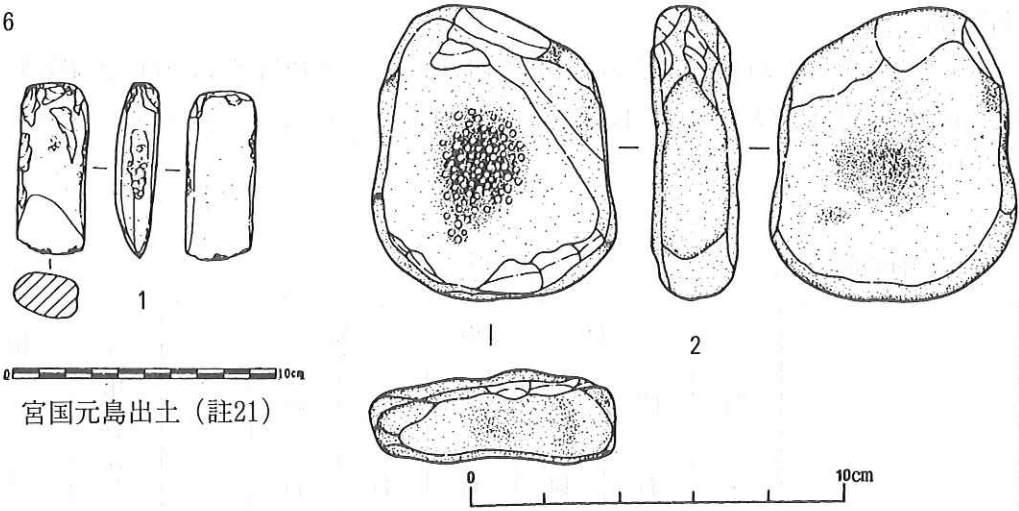
出土した石製品は次の通りである。中でも凹石はサンゴ石灰岩製（註21）や細粒砂岩製（註25）のように材質という点において若干のバリエーションも見られるようである。

【表18】 【図16】

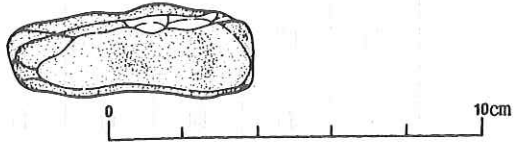
表13 石製品出土表

	実用品							有孔製品	備考
	石斧	凹石	石皿	敲石	磨石	砥石	石錘		
砂川元島	○	○							註25
大牧遺跡		○							註24
住屋遺跡 (尻間)						○	○	○	註22
住屋遺跡	○			○	○	○	○		註27
添道遺跡									註31
高腰城跡		○		○		○			註26
野城遺跡	○		○	○	○	○			註24
宮国元島	○	○						○	註21

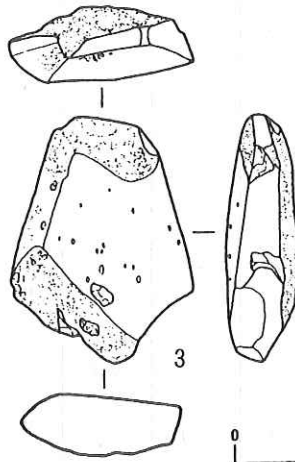
図16



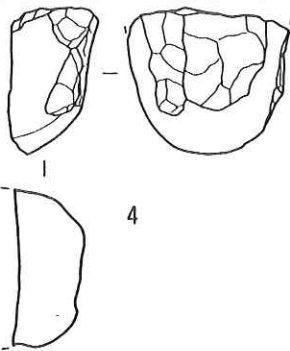
宮国元島出土 (註21)



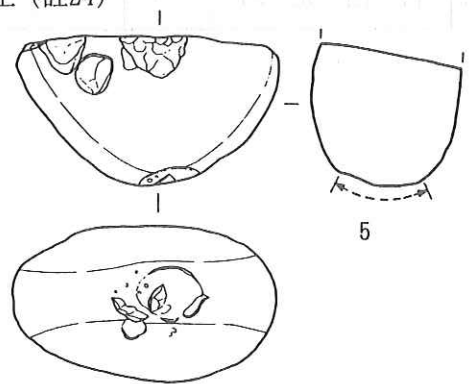
砂川元島出土 (註25)



野城遺跡出土 (註24)



野城遺跡出土 (註24)



野城遺跡出土 (註24)

1 : 石斧 2 : 凹石 3 : 砥石 4 : 敲石 5 : 磨石

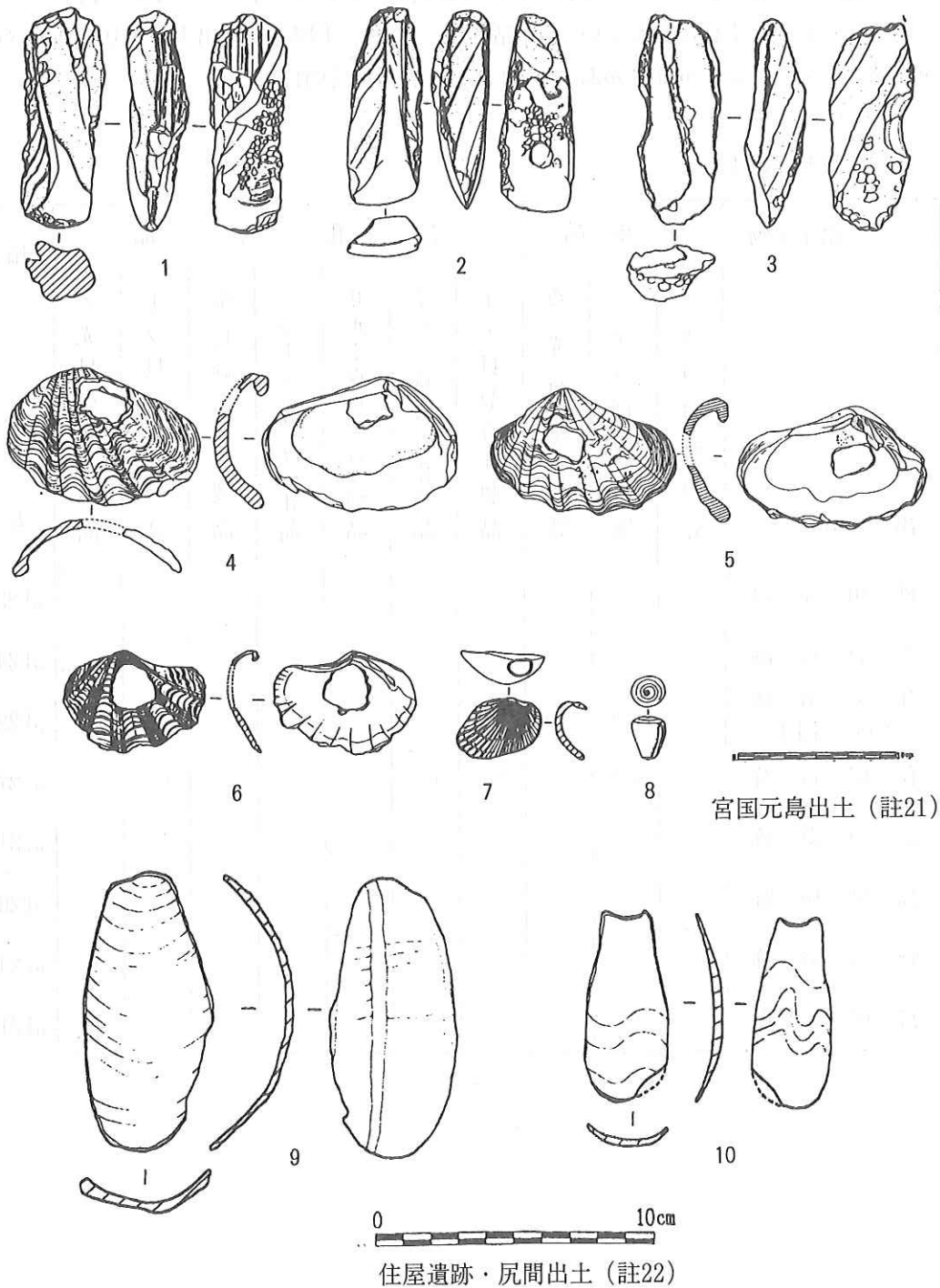
貝製品

貝製品は、多様な種類の貝を素材にした有孔製品と貝錘が大半のウェイトを占めるようである。一応貝斧も検出されているが攪乱層あるいは客土層からの出土であり、他地区の包含層から紛れ込んだ可能性がある。(註21) 【表14】 【図17】

表14 貝製品出土

出土異物 出土遺跡	実用品			有孔製品						備考	
	シャコ貝製貝斧	シャコ貝製貝錘	夜光貝製貝匙	イモ貝製有孔製品	イタヤ貝製有孔製品	サルボウ貝製有孔製品	シラナミ貝製有孔製品	宝貝製有孔製品	ホラ貝製有孔製品		夜光貝製有孔製品
砂川元島							○				註25
大牧遺跡											註24
住屋遺跡 (尻間)		○	○								註22
住屋遺跡	○	○		○	○			○	○	○	註27
添道遺跡											註31
高腰城跡											註26
野城遺跡											註24
宮国元島	○	○				○					註21

図17



1 ~ 3 : 貝斧 4 ~ 6 : 貝錘 7 · 8 : 有孔製品 9 · 10 : 貝匙

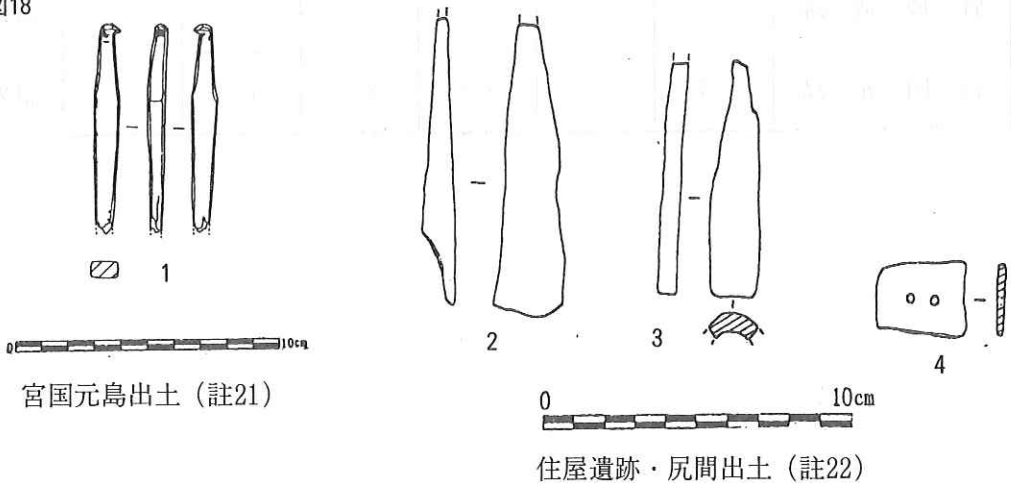
骨製品

骨製品は実用品を中心に住屋遺跡（註27）から出土している。【表15】 【図18】

表15 骨製品出土表

出土骨製品 出土遺跡	実用品				装飾品・その他				備考
	骨 鏃	骨 針	骨 錘	骨 篋	骨 製 簪	有 孔 製 品	有 孔 サ メ の 脊 椎 骨 製 品	研 磨 製 品 用 途 不 明 管 骨	
砂川元島									註25
大牧遺跡						○		○	註24
住屋遺跡 (尻間)	○	○	○	○	○	○	○		註22
住屋遺跡									註27
添道遺跡									註31
高腰城跡									註26
野城遺跡									註24
宮国元島					○				註21

図18



1：簪 2・3 管骨研磨製品 4：有孔製品

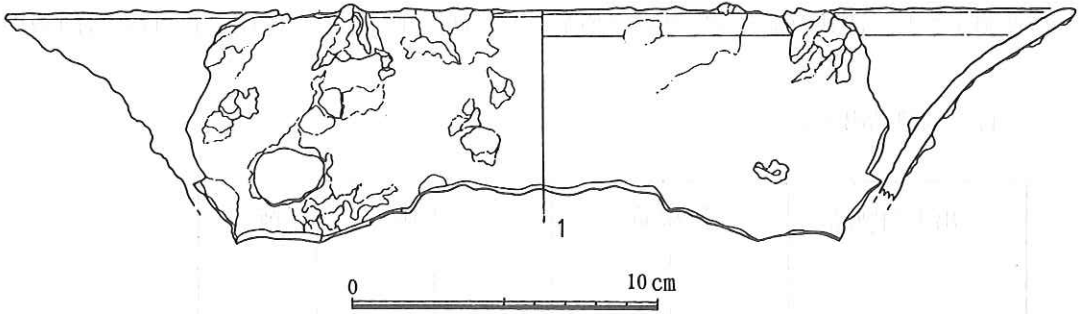
鉄製品

鉄製品は鉄鍋などの実用品の出土が顕著である。なお、鉄釘は確認されたもの全てが角釘である。【表16】 【図19】

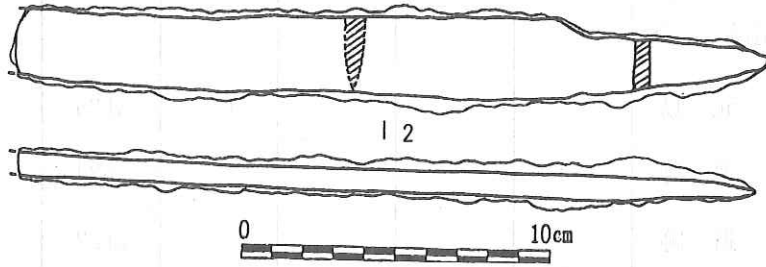
表16 鉄製品出土表

出土鉄製品	実用品				その他		備考
	刀子	鉄鍬	鉄釘	鉄鍋	棒状製品	鎧の小札	
砂川元島	○	○		○	○		註25
大牧遺跡							註24
住屋遺跡 (尻間)	○						註22
住屋遺跡	○		○	○		○	註27
添道遺跡							註31
高腰城跡		○					註26
野城遺跡							註24
宮国元島	○		○	○	○		註21

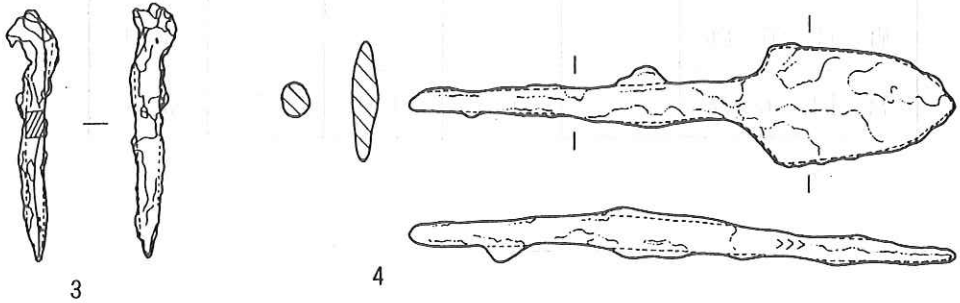
図19



砂川元島出土 (註25)



住屋遺跡・尻間出土 (註22)



宮国元島出土 (註21)

高腰城跡出土 (註26)

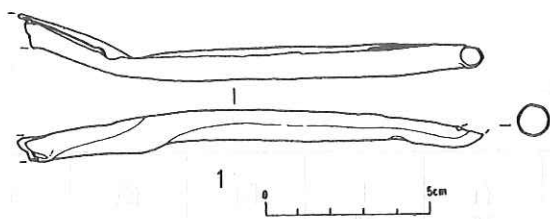
1 : 鉄鍋 2 : 刀子 3 : 鉄釘 4 : 鉄鍬

銅製品

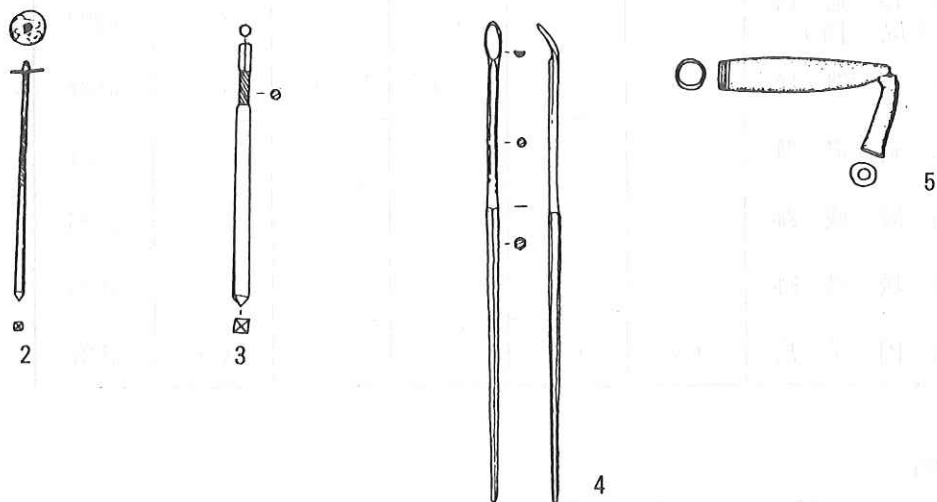
銅製品は、煙管の部品や簪等が出土している。用途不明品は今帰仁城（註32）等の例から推測すると、武具の金具や家具の留め金などの可能性が考えられる。【表17】 【図20】

表17 銅製品出土表

出土銅製品 出土遺跡	実用品		その他		備考
	銅製煙管柄部	銅製煙管吸口	青銅製簪	用途不明品	
砂川元島				○	註25
大牧遺跡	○				註24
添道遺跡					註22
住屋遺跡 (尻間)					註27
住屋遺跡					註31
高腰城跡					註26
野城遺跡					註24
宮国元島		○	○	○	註21



大牧遺跡出土 (註24)



宮国元島出土 (註21)

1 : 柄部 2 : 煙管 3 : 吸口

雁首

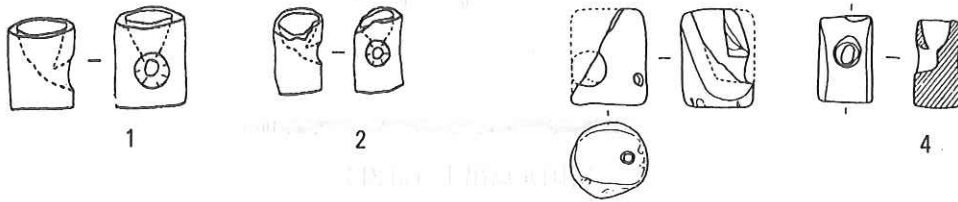
雁首は各材質とも検出されているが、全種類を網羅するのは住屋遺跡のみである。

【表18】 【図21】

表18 雁首出土表

出土雁首 出土遺跡	石製雁首	土製雁首	陶製	磁製	金属製	備考
砂川元島	○	○				註25
大牧遺跡						註24
住屋遺跡 (尻間)			○		○	註22
住屋遺跡	○	○	○	○	○	註27
添道遺跡						註31
高腰城跡						註26
野城遺跡						註24
宮国元島	○	○			○	註21

図21



0 10cm

住屋遺跡・尻間出土（註22）

3

0 10cm

宮国元島出土（註21）

1・2：陶製雁首 3・4：石製雁首

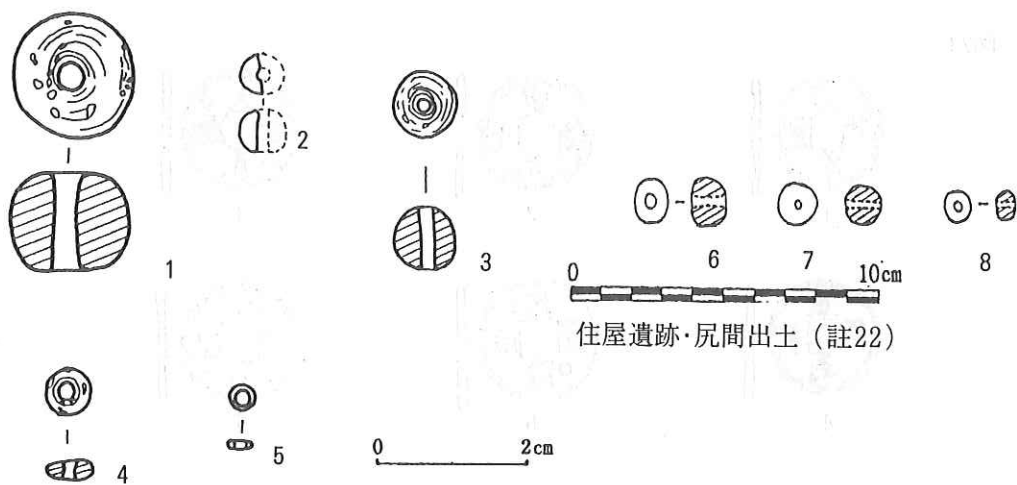
玉類

ガラス製のものが主流をなす。中でも丸玉が主であるが、管玉の可能性もある資料も高腰城跡（註26）で出土している。【表19】 【図22】

表19 玉類出土表

出土遺跡 \ 出土玉類	ガラス製	勾玉	備考
砂川元島	○		註25
大牧遺跡			註24
住屋遺跡 (尻間)	○		註22
住屋遺跡	○	○	註27
添道遺跡			註31
高腰城跡	○		註26
野城遺跡			註24
宮国元島	○		註21

図22



住屋遺跡・尻間出土（註22）

宮国元島出土（註21）

1～8：ガラス製丸玉

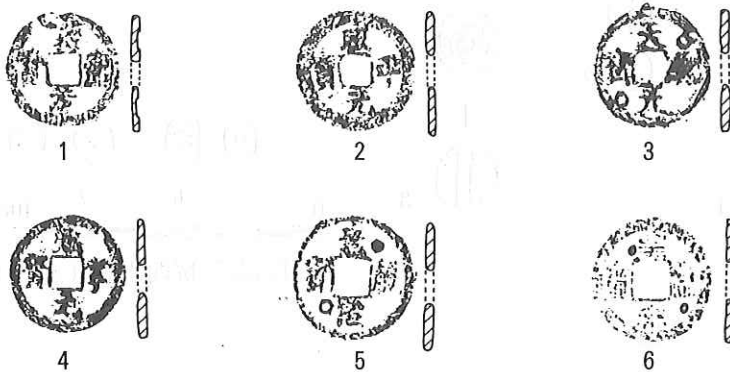
古 銭

古銭は判読可能なもので全11種類検出されている。高腰城跡（註26）の例では両端に径2mmの孔を穿ったものも出土している。【表20】 【図23】

表20 古銭出土表（銘柄の下の数字は初铸造年）

出土遺物 出土遺跡名	天聖元宝・北宋・1023	皇宋通寶・北宋・1039	熙寧元宝・北宋・1068	元豐通寶・北宋・1078	元祐通寶・北宋・1086	聖宋元宝・北宋・1101	崇寧重寶・北宋・1102	熙寧元寶・北宋・1102	紹聖通寶・北宋・1190	寛永通寶・江戸・1638	無文銭	備考
砂川元島												註25
大牧遺跡												註24
住屋遺跡 (尻間)			○									註22
住屋遺跡	○		○	○	○	○			○	○		註27
添道遺跡												註31
高腰城跡		○					○	○				註26
野城遺跡												註24
宮国元島											○	註21

図23



高腰城跡出土（註26）

製鉄関連製品

製鉄関連製品として、ファイゴの羽口、鉄滓が検出されている。住屋遺跡の鉄滓は県内で3例目の砂鉄系精錬鍛冶滓であるとの分析結果が報告されている。(註27) 【表21】

表21 製鉄関連品出土表

出土製鉄関連製品 出土遺跡	ファイゴの羽口	鉄滓	砂鉄系精錬鍛冶滓	備考
砂川元島		○		註25
大牧遺跡				註24
住屋遺跡 (尻間)				註22
住屋遺跡			○	註27
添道遺跡				註31
高腰城跡	○			註26
野城遺跡	○			註24
宮国元島		○		註21

宮古島スク時代相当遺跡出土の陶磁器による編年 【表22】 【図24】

ここでは、宮古のスク時代相当遺跡から出土した陶磁器（特に青磁碗・白磁碗）のうち出現・存続期間がはっきりしている資料をピックアップして、存地土器との時間軸をクロスさせる作業を試みようと思う。なお、編年のバックボーンは金武正紀氏のものを採用する。これは、氏の編年が日本本土・東南アジア各国の船載陶磁器との磁器区分的関わり、文献に基づく遺物の資料状況の補強等を経て作成されているからである。

編年に採用する資料の概要は次の通りである。

白磁玉縁口縁碗→熱田貝塚（註34）や、大泊浜貝塚（註35）の出土状況から、12世紀前半と考えられるが、太宰府史跡の資料で11世紀（1091年）の墨署銘を有する須恵器と共伴していることから11世紀末まで上がる可能性がある（註36）。

青磁劃花文碗→ピロースク遺跡（註38）や、稲福遺跡（註39）、拝山遺跡（註40）などの出土状況から、12C後半～13C前半と考えられる（註36）。

青磁櫛描文碗（珠光青磁）→稲福遺跡（註39）の出土状況から、12C後半～13C前半と考えられる（註36）。

青白磁合子蓋→いわゆる影青（インチン）。西暦1000年前後、中国江南省の景德鎮で焼造が始まり、南宋時代には福建の各窯が模倣して流行した（註36）。この合子蓋は13C～14Cに属する（註24）。

青磁鎬蓮弁文碗→今帰仁城主郭の出土状況から13C紀後半～14C前半と考えられる（註36）。

白磁ピロースクタイプ碗→ピロースク遺跡、新里村（東）遺跡などの出土状況から、13C後半～14C前半と考えられる（註36）。

白磁口禿碗→新里村（東）遺跡や、今帰仁城志慶真門郭（註32）などの出土状況から、13C後半～14C前半と考えられる（註36）。

青磁雷文帯碗→亀井明德氏が山田城跡の資料から14C後半～15C前半と編年しているが、今帰仁城の出土状況から妥当と考えられている（註36）。

青磁無文外反碗→今帰仁城志慶真城郭から大量に検出されており（註32）、その出土状況から14C後半～15C前半と考えられる（註36）。

線刻細蓮弁文碗→今帰仁城志慶真門郭（註32）の出土状況から15C後半～16C前半と考えられる（註36）。

挟入高台皿→高台の畳付が4か所挟られているのが大きな特徴。名蔵シダタル遺跡などの出土状況から15C～16Cと考えられている（註36）。

表22 編年の年代決定資料に採用した陶磁器出土表

出土陶磁器	白磁・玉縁口縁碗 (11C後半～12C前半)	青磁・劃花文碗 (12C後半～13C前半)	青磁・櫛描文碗 (12C後半～13C前半)	青磁碗 (12C後半～13C前半)	青磁・鎬蓮弁文碗 (13C後半～14C前半)	白磁・口禿碗 (13C後半～14C前半)	白磁・ピロースクタイプ碗 (13C後半～14C前)	青磁・雷文帯碗 (14C後半～15C前半)	青磁・無文外反碗 (14C後半～15C前半)	青磁・線刻細蓮弁文碗 (15C後半～16C前)	白磁・挟入高台皿 (15C後半～16C前半)	備考
砂川元島	○			○			○	○	○			註25
大牧遺跡									○			註24
住屋遺跡 (尻間)							○	○		○		註22
住屋遺跡												註27
添道遺跡		○			○	○		○		○		註31
高腰城跡	○	○		○	○	○	○		○		○	註26
野城遺跡		○	○	○	○		○		○	○	○	註24
宮国元島								○	○	○		註21

図24 宮古島スク時代遺跡出土の陶磁器による編年（註36）

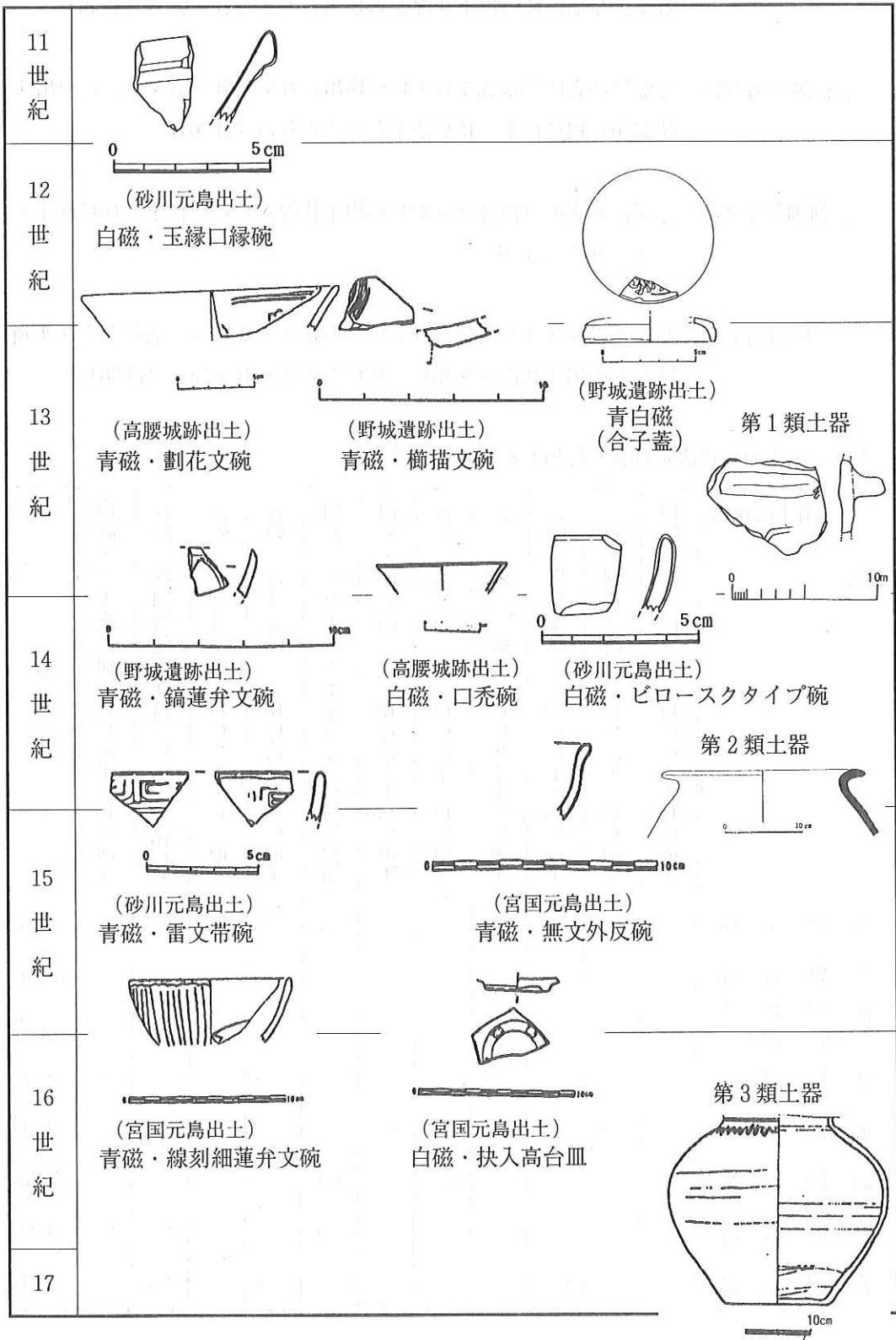


表23 出土自然遺物

	砂川元島	大牧遺跡	住屋遺跡(尻間)	住屋遺跡	添道遺跡	高腰城跡	野城遺跡	宮元元島
貝類	陸産貝 巻貝 二枚貝		チョウセンサザエ マガキ貝	チョウセンサザエ シヤコ貝 タカセ貝		巻貝 2枚貝	巻貝 2枚貝	
魚類	アダイ科 ハリセンボン サメ 陸ガメ		ハリセンボン ペラ科 アダイ科	サメ ハリセンボン アダイ モンガラワラ ハギ		アダイ科 ハリセンボン	サメ類 ハタ科 アダイ科 ハリセンボン	
哺乳類	ウシ ウマ イノシシ		イノシシ	犬・ネコ・ジユ ゴン・牛・山羊・ 猪・鼠		ウマ ウシ	イノシシ ウシ	
爬虫類	陸ガメ 海ガメ		ウミガメ	ウミガメ		ウミガメ	ウミガメ	
鳥類			ニワトリ				種類不明	
炭化麦			65粒					
炭化米			2粒					
人骨								
	註25	註24	註22	註27	註31	註26	註24	註21

遺 構

ここでは、各遺跡から検出された遺構を項目別に紹介していくことにする。【表24】

表24

出土遺構 出土遺跡	堅 穴 住 居 跡	平 地 住 居 跡	炉 跡	溜 井 戸	敷 石 遺 構	土 壙 墓	石 棺 墓	礫 敷 土 壙 墓	製 鉄 遺 構	廃 棄 施 設	備 考
砂 川 元 島			○		○				○		註25
大 牧 遺 跡											註24
住 屋 遺 跡 (尻 間)	○	○	○	○							註22
住 屋 遺 跡	○	○			○	○	○	○			註27
添 道 遺 跡											註31
高 腰 城 跡											註26
野 城 遺 跡											註24
宮 国 元 島	○	○		○					○	○	註21

①堅穴住居跡【図25】

ここでは、住居遺跡（尻間）で検出された2基の堅穴住居跡について説明する（註22）。

(1)第1号堅穴住居跡

約5m×2m、深さ60mの隅丸長方形の住居跡である。ほぼ中央からは直径約90cm、深さ10cmの円形炉跡が検出された。炉面には琉球石灰岩礫が敷かれていた。礫は焼け、その上を灰が覆っていた。東側には階段が4段検出された。堅穴の上場には8つの柱穴が廻っており、屋根がついていたことが理解できる。（註22）。造成時期は中国陶磁器などの出土遺物で判断するならば14世紀後半～15世紀前半と考えられる（註22）。

(2)第2号堅穴住居跡

堅穴の一角と柱穴5つのみ検出された。堅穴は円形状に琉球石灰岩塊の縁石が並び、

その中は約25cm掘り込まれている。柱穴は、竪穴内にあり、第1号竪穴とは異なる。竪穴内からの出土遺物が少ないため、造成時期は判断し兼ねる。

②平地住居跡【図25】

ここでは、住屋遺跡（尻間）で検出された3基の平地住居跡について説明する（註22）。

(1)第一号平地住居跡

約3m×4mの方形で、周囲に8本の柱が廻っていたと考えられる。柱穴は直径約50cm、深さ約40cmである。内に炉跡が検出されないことから屋外炉と考えられる。

(2)第2号平地住居跡

約3.6m×3.6mの方形で、8本の柱が廻っていたと考えられる。柱穴は直径約50cm、深さ約40cmである。柱穴の底には琉球石灰岩石を敷いているのが特徴である。

(3)第3号平地住居跡

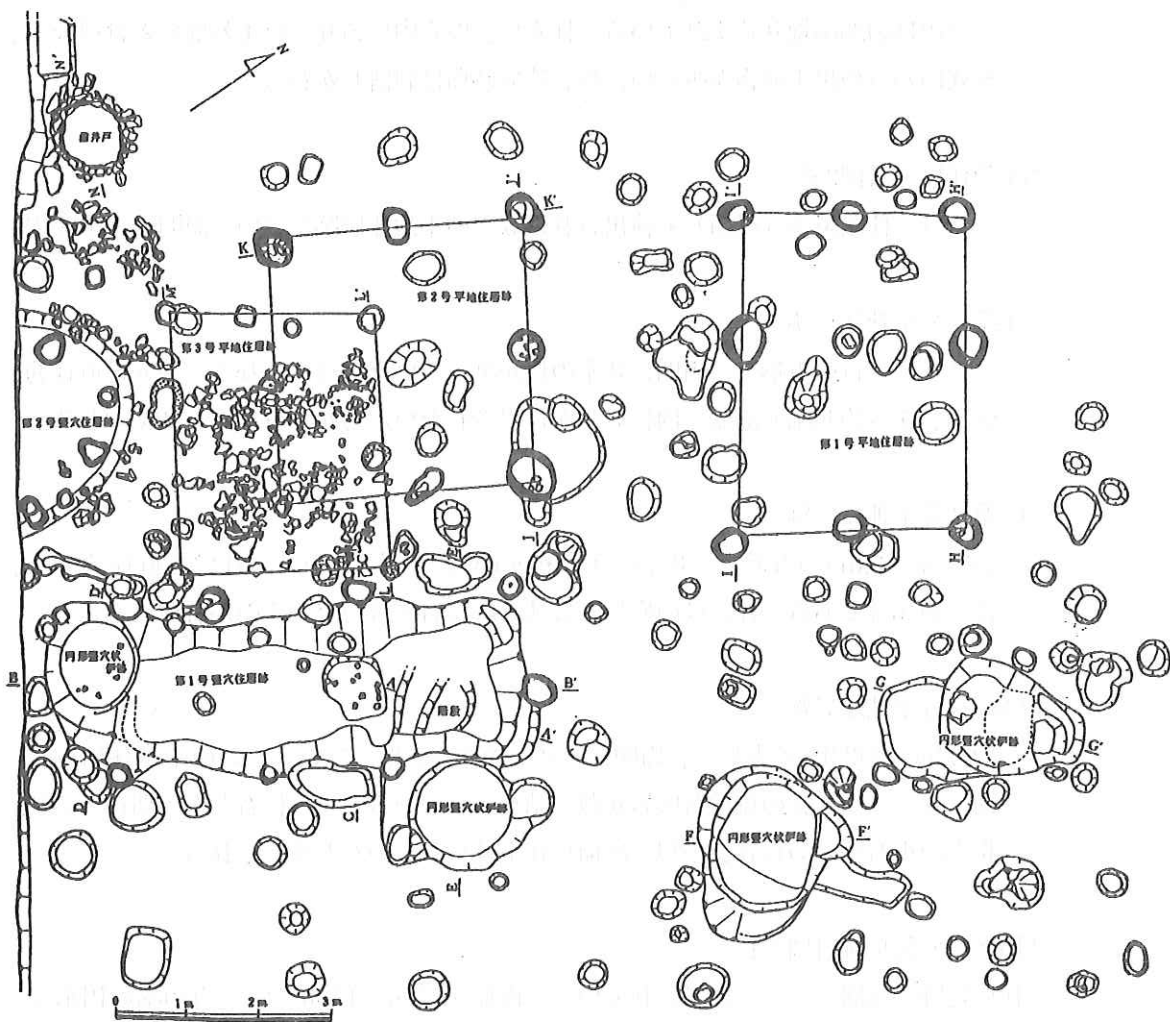
約3.3m×約2.9mの方形で、周囲には8つの柱穴が廻っている。この平地住居の床面には、こぶし大の琉球石灰岩が敷き詰められている。さらに石と石の間には、親指大の小石が詰められ、平坦な床面に仕上げられていたと考えられる。

③円形竪穴状炉跡【図25】

住屋遺跡（尻間）で4基検出されている。直径約1.2m～1.5m、深さ約70cmの円形で、床面には焼土、木炭、灰などが堆積している。内に踏み石をおいてあるものや、地山を削って一段設けたものなどがありそこから出入りしたものと考えられる。なお周囲には不規則ではあるが柱穴があり、屋根がついていたものと考えられる。

④溜井戸【図25】

直径約90cm、深さ約60cmの円形の溜井戸である。地山を掘り込んで、まわりは頭大の琉球石灰岩塊を丁寧に積んでいる。井戸底は地山面そのものである。宮古には戦前までこのような溜井戸が見られ、「カーガマ」と呼ばれていたようである。この溜井戸から検出された遺物は16世紀～17世紀のものである。溜井戸の上に新しい時期の排水溝が造られていたことから平地住居に伴うものであるか、あるいは在番仮屋の時期に伴うものであると考えられる。



第25回 遺構平面実測図

住居遺跡・厩間出土（註22）

⑤廃棄施設

宮国元島で検出されている（註21）。石灰岩の自然の亀裂を利用して、土器、陶磁器、食料残滓などを投棄した落ち込み部で、長さ3m、幅1.5m、深さ2mである。ごみ捨て場的な性格を付与されていたものと考えられる。

⑥製鉄遺構【図26】

宮国元島遺跡では、2基の炉址が検出されている（註21）。1基は直径約1m、他の1基は直径約1.3mの楕円状である。凹地には焼土が敷かれて炉床をなす。大小の柱穴群も検出されるが、まとまったプランを示していない。炉址の周辺から若干の鉄滓が採集されていることから、鍛冶炉として考えられる。

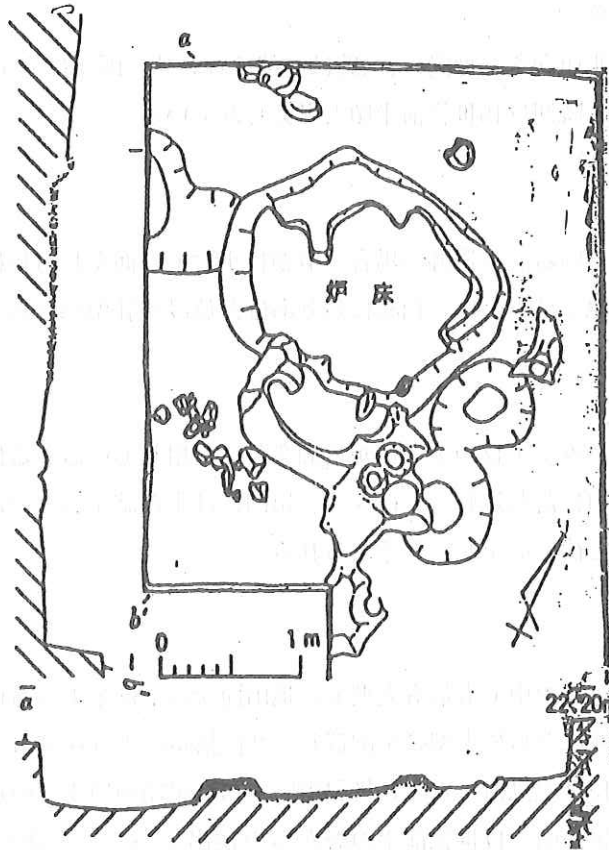


図 26 製鉄遺構実測図 宮古元島出土 (註27)

⑦埋葬施設

住居遺跡の発掘調査で3タイプの形状の埋葬施設が検出されている (註27)。

(a)土壙墓

成人用埋葬墓4基が確認され、うち1期は地山に張りつくような状態で検出され、残り3基が土壙墓としての形態を備えている。

(1)第1号土壙墓

埋葬頭位は北西向きで、左横向き、左腕は伸びた状態で屈葬されている。造成時期は14世紀～15世紀前半頃と考えられている。

(2)第2号土壙墓

埋葬頭位は北西向きで、右横向き、両腕は胸部の前で肘を折り合わす状態で屈葬されている。造成時期は13世紀～14世紀後半の可能性はある。

(3)第3号土壙墓

埋葬頭位は北西向き、仰向け、両腕は胸部で合わせ、両膝は立っている状態で検出された。造成時期は15世紀前半頃と考えられている。

(b)石 棺

11基確認されている。本遺跡の場合、最初に小曆で底面を長方形に造り四周に石灰岩礫や珊瑚礁塊を積み上げ、箱状に造りあげた施設で乳児墓と考えられている。

(1)第1号石棺

地山を掘り込み、1枚のテーブル珊瑚を蓋に利用している。蓋は6片に割れていたが、石棺内に落ち込むことはなく、棺内には土が詰まっていたことから、遺体に土をかけた後に蓋をしたと考えられる。

(2)第2号石棺

検出された石棺の中でも最も大型で、地山面から下は第1号石棺の造りと同じであるが、周囲にさらに大型礫を配置し、2段構造のような造りになっている。下段は地山（13世紀以前）から13世紀中頃～14世紀頃の層までの造成で、上段の礫積みは15世紀中頃～17世紀前半の層からの検出であることから、その中間の層（15世紀前半頃）の石棺を再利用した可能性もある。

(3)第3号、第11号石棺

この2基の石棺は礫積みが破壊を受け、正確な構造を把握することができなかった。11号石棺の方からは乳児骨が確認でき、頭位は北西向きになっている。造成時期はともに15世紀前半頃と考えられている。

(4)第4～10号石棺

この7基の石棺全ての最上部のレベルはほぼ一致しており、石棺内の土は土器片・陶磁器片・獣魚骨片などを含んでいる。造成時期は全て16世紀後半～17世紀前半の施設と考えられている。

(c)礫敷土壙墓

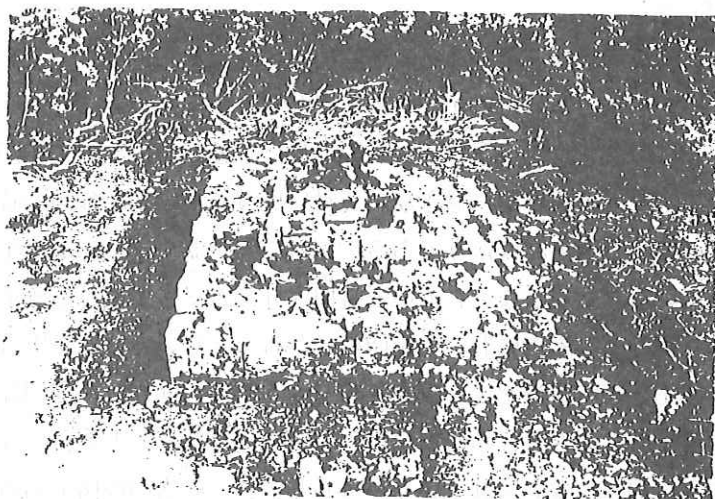
1基だけの検出で、底面に楕円状に礫を敷き、その上に幼児の遺体を屈葬で埋葬している。造成時期は15世紀前半頃と考えられている。

⑧補足（ミャーカ）

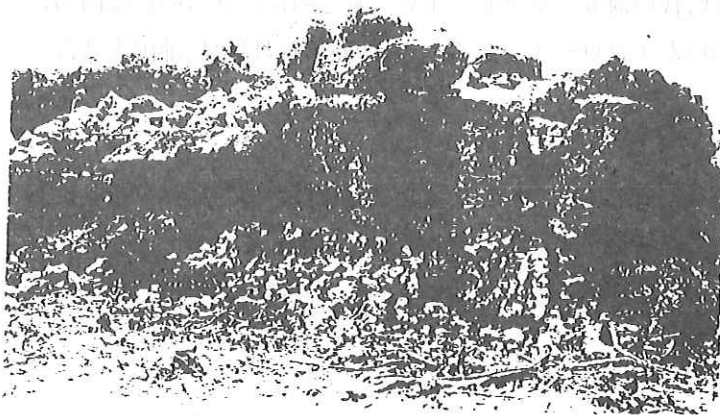
宮古各地にはミャーカと呼ばれる巨石墓が広く分布する。石灰岩を板状に加工して、巨大な箱形の墓を造営したもので、二重構造のものもある。始現の時期は不明だが14世紀後半～16世紀が中心で、その後も一部に続けられた模様である。名称は異なるが似たような板状墓は八重山諸島にも分布する。ミャーカには規模の大小があるが（註11）、巨石を使用し、東西に長く長方形に石積みまたは板石を立てめぐらし、高さ1.8m前後、内部に石室または箱敷石棺墓を設けるなどの共通性をもっている（註11）。久松のミャーカ、伊良部のスサビミャーカ〔図27—1. 2〕、来間のスムリミャーカ、などは規模の大きな墓として知られている（註11）。

図27 スサビーミャーカ（註12）

1



2



V・収束

宮古のスク時代は断片的な資料から推測する限り沖縄本島のグスク時代の文化とある程度同じ様相を呈していたようである。それはすなわち農耕の痕跡・鉄器文化・海外貿易・国内貿易などといった大まかな部分において、宮古が沖縄本島の文化圏に統合されていたということを示唆しているといっていいただろう。

しかしながら城（グスク、城）、スク、元島などの不統一な遺跡群の名称に始まり、沖縄本島では出土していない陶磁器（あるいはその逆）、八重山の流れをくむといわれる初期の在地土器、八重山編年の第2期からの存続の可能性を残す貝斧、住居趾、葬制などからもわかるように、1474年頃に仲宗根豊見親が琉球王府に宮古首長に任命され、琉球王府による政治統一がなされる以前からグスク時代の周辺に至るまでの間沖縄本島のグスク時代（移行期含む）文化とは一線を画す文化の痕跡あるいは文化形成のなされ方の一端を確認することができる。

これらの断片的な資料（沖縄本島グスク時代と共通する資料も含む）を有機的に結合させて捉えることが必須だといえるが、その基盤となる部分（例えば在地土器の細編年や細検討等）が十分にこなされていないというのが現状である。在地土器ではなく船載陶磁器・文献・その他の本来は補強要素に過ぎない資料に拠って大雑把な分類と時期区分まで片づけられてしまっている遺跡群ばかりである。さらに陶磁器や文献による年代決定が限界と危険性を伴っている以上現在なされている時期区分でさえも信頼性と確実性という点において、すなわち根幹となる点において疑問視せざるをえないという事実もある。在地土器についていえば正確な時間軸を伴う形式分類とするための共存・共伴関係の確認の積み重ねといった作業が宮古スク時代の研究に最も欠けている部分だといえよう。そのために、いまだ採用できる編年が確立されていないばかりか、その次の段階である周辺地域との関わり方などといった有機的結合（総合）的研究も限界にきている。

宮古島スク時代の研究姿勢として求められるのはこれらの足場固めとそれを基にした総合を念頭においたアプローチであろう。[1998年11月17日、冲国大考古ゼミ発表原稿]より

※筆者補記

今回、本稿を掲載していただきました平良市総合博物館及び折りにふれ貴重な御教示を賜りました高宮廣衛・中村愿、諸先生方に感謝します。

また、図版作成を沖縄国際大学4年次の知念隆博君に手伝ってもらいました。記して謝意を表します。

引用文献

- (註1) 大城逸郎「宮古諸島」『沖縄大百科辞典』下 ナーン 沖縄タイムス社 1983年
- (註2) 親泊宗二「宮古島」『沖縄大百科辞典』下 ナーン 沖縄タイムス社 1983年
- (註3) 田里友哲「洞穴泉」『沖縄大百科辞典』中 ケート 沖縄タイムス社 1983年
- (註4) 木村政昭「宮古凹地」『沖縄大百科辞典』下 ナーン 沖縄タイムス社 1983年
- (註5) 高宮廣衛「先史諸島の土器文化」『沖縄歴史地図考古編』
宮城栄昌・高宮廣衛 柏書房 1983年
- (註6) 盛本勲「南北琉球圏に共通・類似する遺物」『考古学ジャーナル』No.352
ニューサイエンス社 1992年
- (註7) 宮城栄昌・高宮廣衛編『沖縄歴史地図考古編』 柏書房 1983年
- (註8) 沖縄県教育委員会『宮古の遺跡』 1983年
- (註9) 金武正紀「先島の先史・原始時代」『掘り出された沖縄の歴史』
沖縄県教育委員会 1982年
- (註10) 砂川秀雄「元島」『沖縄大百科辞典』下 ナーン 沖縄タイムス社 1983年
- (註11) 森浩一企画 嵩元政秀・安里嗣淳共著『日本の古代遺跡47沖縄』 保育社 1993年
- (註12) 安里嗣淳「調査地域の地理的・歴史的環境」
『ぐすく分布調査報告書(Ⅱ) -宮古諸島』 県教育委員会 1990年
- (註13) 稲村賢敷「上比屋遺跡の試掘」『宮古島庶民史』 1957年
- (註14) 国分値一『南島先史時代の研究』 慶友社 1972年
金子エリカ・メリヒヤール「保良元島の発掘調査」『ARCHAEO LOGICAL
WORK ON MIYAKO ISLAND RYUKYUS PURAMUTUZUMA』 1972年
- (註15) 友寄英一郎・嵩元政秀「上ノ頂遺跡調査概報」『琉球史学第四号 宮古特集号』
琉球大学史学会 1973年
- (註16) 城間勇雄「砂川村落の構造と変遷」『郷土 第11 本部備瀬部落・第三次宮古島
調査報告』 沖縄学生文化協会 1972年
- (註17) 砂川元島遺跡調査団『砂川元島遺跡発掘調査概報』 1975年
- (註18) 砂川元島遺跡調査団『砂川元島遺跡発掘調査概報 第二次』 1976年
- (註19) 安里進「沖縄陶器の影響を受けた宮古式土器について」『やちむん第五号』
やちむん会 1975年
- (註20) 下地和宏「野城式土器について」『琉球大学第十号』 琉球大学史学会 1978年
- (註21) 上野村教育委員会『宮国元島』 1980年
- (註22) 沖縄県教育委員会『住屋遺跡緊急発掘調査報告』 1981年
- (註23) 平良市教育委員会『住屋遺跡(俗称・尻間)発掘調査報告』 1983年

- (註24) 城辺町教育委員会『大牧遺跡・野城遺跡』 1987年
- (註25) 城辺町教育委員会『砂川元島』 1989年
- (註26) 城辺町教育委員会『高腰城跡』 1989年
- (註27) 平良市教育委員会『住屋遺跡』 1992年
- (註28) 下地和宏「宮古土器の変遷」『沖縄県の土器目録』 沖縄県立博物館 1984年
- (註29) 平良市教育委員会『平良市史 第八巻 資料編(考古)』 1998年
- (註30) 下地和宏「宮古の土器文化—その時代区分について」『宮古研究 創刊号』 宮古郷土史研究会 1978年
- (註31) 多良間村教育委員会『多良間添道遺跡』 1996年
- (註32) 『今帰仁城跡発掘調査報告書』 1996年
- (註33) 『ヒヤジョー毛遺跡』 那覇市教育委員会 1994年
- (註34) 『恩納村熱田貝塚発掘調査ニュース』 沖縄県教育委員会 1978年
- (註35) 『大泊浜貝塚』 沖縄県教育委員会 1986年
- (註36) 金武正紀「沖縄の中国陶磁器」『考古学ジャーナル』 No.320
ニューサイエンス社 1990年
- (註37) 「景德鎮」『やきもの辞典』 平凡社 1984年
- (註38) 『ピロースク遺跡』 石垣市教育委員会 1983年
- (註39) 『稲福遺跡発掘調査報告書(上御願地区)』 沖縄県教育委員会 1983年
- (註40) 『拝山遺跡』 沖縄県教育委員会 1987年